

誤るものは青年學者の思想の危険であることである。これは嘗つて大學側に立つてゐた連中の心事を指して云つてゐた言であらう。けれども同じやうなことを青年學者の方からして鸚鵡返しに云つてゐるものがある。民國を誤るものは老儒のあたまの餘りに古きに失せるものである。水掛け論であるからどちらとも云へない。どちらも案するに及ばぬ。支那と云ふ國は民衆が一番よく判つてゐる。人は衆愚と云ふけれども民衆は民意の存するところ。その自然に大勢のきめて行く所に従つて進まば差支ないのであると云ふ樂觀説を自分はいつでも持つてゐる。

その大勢の赴く所には無理がない。支那には支那に向いた自然の大勢が動きつゝある。それをよく列國からも眺めてゐるがそれぞれ列國には自國の立場があり族に利害關係がある。之を唆つたりけしかけたりしてその大勢を無理に煽り作らうとするものがある。支那それ自體の爲めには要らぬことである。採らないことである。又採るべからざることである。ところが支那にも純理から冷靜に行く人ばかりでなく列國の人

人に動かされ、又物質的に迷はされたりなどして結局じつとしてゐればよいものを他から動かされてゐるものがかかりある。つまり支那としては益のない事を誘惑につられてやつてゐるやうなもので甚だ考のない話である。

支那が外來思想によつて自國の思想界の發達を圖ると云ふ事は求むべく又それには努力すべきことである。しかしそれが時の勢ひ例の共產氣分の如く滔々として潮の如く入り來たりたるものもあつたが數年たゝぬうちにそれが又支那の大勢から受容れられなくなつた。それに對しては強ひて無理な宣傳をしなくとも社會上から自ら判定せられて來るのである。そこを超越して飄逸味を以つて大觀して見てゐると云ふと自ら歸着する處に歸着してゐることがありありと判る。實にそこは面白いやうである。

民國の青年は自國の國際的地位の低いが如く取扱はれてゐるのをひどく氣に病む。病む必要のないのを無暗みに氣にする。そして支那らしくないやり方であせり氣味になる。採り入れなくともよい外來の文化殊に支那に不適當な思想でも何でもハイカラ

な気持ちで之を輸入しようとする。わるくない事であるかも知れぬが、無駄な事である。支那には支那として老子莊子なり韓非子なり立派な思想家がたくさんある。又俗間にもいくらでも道教じみた珍話がある。あつても満足が出来なくて採入れるのは止むを得ぬ事であるが自國在來のものをさうその卑下するに及ばぬではないか。近時ロシアかぶれして來た民國青年たちのうちにはかう云ふのがあるから困る。支那青年一般の反省を求めたいのである。

「自分たちはロシアの文學ロシアの思想にあこがれてゐるのだ」

「自分たち六朝體の古文だの詩賦だのそんな頑固な野暮なものは作らないのだ」

「支那の美術などつまらない。やつて見ようと云ふ氣もせぬ。支那古代の文化などにあこがれてゐるやうな人間では駄目だ」云々

留意すべきはかう云つたうは調子の思想の傾向である。ハイカラな青年も結構であるが何もかもかうして自國の價を少しも知らぬ上にけなしてかゝるやうな傾向を持つ

ことは全く戒めたいものである。長江流域のモタン・ボーイにそれが殊に多い。

支那五千年の文化の燦然たる香氣はどうしたつて歐米には求め得られない。印度や埃及乃至はアッシリア、バビロニアだつてかう云つた文化の華を見出すことは出來ない。これを有する支那青年は自分たちの誇りとし又楽しみとしなくてはならぬのである。自分自らが之をけなしてかゝるとは何たる不見識であるか。又不謹慎であるか。支那は支那としてブラウドが十分にあつてほしい。民國に生き残つて老爺たちは皆ブライドを有し支那在來の中國衣裳を着て中國帽を糖つてゐる。それでよろしい。必ずしも西洋の服裝に改め洋風を真似るのが文明の魁けではありはしない。考へなくてはならぬのはこの外國の思想かぶれに陥ることである。

孔子教も老莊も張天師も佛教も何もかも自國のものを卑下してしまつて唯外國かぶれになるのは支那を没却した結果である。青年の間から多少突飛な變りもの出ることも歓迎はするが東亞の天地を無視したり之を無價値のものゝ如く卑下したりするの

は何たる本末顛倒の考であらう。頑固な云ひ分のやうに聞こえるかも知れぬが少しも
辟易することはいらぬ。むしろ大いに青年諸君によつて東亞の精神活動思想問題を今
後發揚してもらはなくてはならぬのである。大いに熱を以つて當たつて然るべきもの
である。自分出共はあの大きな長江の流れを見てゐる丈でも無限の思想に打たれる。
又洞庭から出て來るあの大きな筏流しの光景を眺むる丈でも無上の快感を感じる。そ
して西洋などの判らぬ一種の人世觀なり哲學なりを觀じ來たるのである。

中華民國のこの絶大なる自然界は歐洲の全體よりより大なる面積を持つてゐるので
あるからその大自然をあたまに描いて我が物顔に好きな思索に耽つてゐるのも人生の
快事ではないか。況して古來諸子百家の説なり漢魏、六朝、隋唐、宋元、明清と各時
代の先哲文人、史家の考へた智慧を批判して見るなり又先人の體驗した迹を追想して
更に先人未踏の事蹟を發見するなりいくらでも思想的に開拓せらるべき所はあるので
ある。

尙ほ民國青年どもが徒らに日本あたりの學校中毒にかゝりむやみに學校熱に浮かさ
れその畢業後歸國してから先きの殆んど見當もつかずたゞ向學心に迷はされてゐるの
を見て自分はいたく同情するのである。長江方面から日本に留學に來てゐるのは殊に
多いが例へば長江筋はさまでまだ電氣事業にしても十分に發達して居らない。然るに
猫も杓子も電氣電氣と電氣に浮かされてゐる。電氣畢業生ばかり米國からも英國から
も日本からも殺到するものだからつまり今日では溢れて結局専門外ながら國民政府に
入りて政治屋の手足にでもかなり陣笠として動きの止むなきに至つたものが多い。中
には又高等游民で遊んでゐるものもある。歐米や日本を先進國だと云ふ風に見てゐる
ならばいざ知らず先進國らしくない點がいくらかでもあるのではないか。たとひ、さう
だとしたところで民國に直ちに應用の出來ぬ事、適用して却てよくないことも多いの
であるからその邊は云ふ迄もない事であるが留意せられて欲しいのである。

自分は長江江邊の思想の流れはどこ迄も平和的で進むべきもので又平和の民で充ち

満ちてゐる所であるから一時的の悪思想に迷はさるゝことなく本當の良民の心である所のアンダー・カーレントの動かない處を信するものである。しかし思想の動きの爲めに絶えず時局は着色せられ列國は少なからず損害を蒙るのであるから爲政者はそこに注意を怠つてはならぬ。しかし學者は單なる表面の思想の動きばかりを見ることを能事とせず千古に渡る幽玄なる和平的思想の偉大なるものを常に好んでゐることが支那人を理解する上に必要なことであることを附言しておきたのである。

以上長江江邊の思想の流れに就いて述べた卑見は最近兩三年以來長江を中心に思想上の著しき動搖があり一般有識階級殊に學生青年の間には目醒ましき思想運動があり從來の和平なる支那獨特の氣分の外に對外的自覺の色彩を加へ來つた事實のあることは世人の夙に認むる所である。要はその青年たちの思想運動と云ふのは國際地位の向上を目的として帝國主義の打破を高調するものである。自分は支那時局に對する思想上の問題は之を重要視しないのではないが長江江邊の眞の思想はかゝる一時的の事實

から神經質的にならずとも支那三千年の尊大性によつて外來の不健全なる思想、又外來の高壓的政策と云つたやうなものはおのづから之を驅除することが出來ると信する。

支那は長江の流れと同じく千古の流れを経て容易に他國の侵す可からざる底力を有してゐる。他國からは何物も之を破壊することが出來ぬ。一時的の流行じみた悪思想などで以て迷はされることがよしんばあつてもそれが爲めは千古の支那の大陸的國民性と云ふものは亂だされるものではない。自分は支那民族を買ひ被つてゐるのではないが實際かれらはその民族的の潜勢力を有しとどのつまりは依然その本來の眞價を發揚するものである。浩浩乎たる長江の流れは正に宛かも漢民族それ自身の思想の侵かすべからざる深みをシンボライズしてゐるものであると云ふことをこゝに再び斷言して憚らぬものである。

九 民國人より觀た日本朝野の對支外交

三十七 民國青年より見たる島國日本

近來上海邊りに發行せらるゝ中華民國新地圖の色刷を集めて見ると大分毛色の變つた者がある。その地圖の編輯大意の凡例を見ても判るが又その國土の接壤地域に記入せられた朱字の注釋を見ても判るのである。と云ふのはその地圖發行の動機が單なる地理地誌の材料に供すると云ふ計りでなく悲憤慷慨のたねを指摘する意味で發兌されてゐるのが多いのである。

その支那地圖には一枚刷りの大きく擴げて見らるゝものもあれば又書物の體裁に帖になり分省地圖として掲載されてゐるものもあり、又扇の片面へ以つて行つて色刷で朝鮮に現はし涼風を呼びつゝ眺め得らるゝやうに出來てゐるものもある。勿論これは單な

る學校用の地圖ではなくして一種政策的のものである。その暗々のうちに觀るものをして切齒扼腕せしむる目的で作られたものであることは云ふまでもない。謂はゞ一種の愛國地圖とでも題したらよささうな氣の利いた宣傳用の地圖である。固よりこは外人に見せる爲めのものではなく支那青年たちに見せて深く肝銘せしむる爲めに作られたものである。支那青年たちは之によつて立派に煽動せられその血を沸かしめ熱辯を振はんとするの一大衝動を興へらるゝものである。中には何のこともなく存外嫌に釘で一向平氣で畫餅ほごにも掛かり合はないのである。しかし發行者の方ではその發行の裏面に色々各方面からの交渉關係もあり魂膽があつて兎も角編輯せしめ發行させたものである。民國の青年志士がそれによつて神經を尖らせやうと、尖らせまいとそれは問ふ所ではないのである。實際の處はそれをきは物として出すだけ出せばよいのである。そして事實その類の地圖は只同様に安く廉賣されてゐるのである。上海は大馬路、先施公司、永安公司附近には路傍で行人見かけて色々賣り付け

てゐることもある、實に重寶に出來てゐて書齋、大客廳、圖書館あたりでも備品として壁に掛けておいても大いに参考になるものである。

自分は昨年夏上海のバンドを散策中偶然例の目的で出來てゐる大扇子を獲て少なからぬ興味を感じたのであつた。ところが最近又北京東城のトンアンシイチャン東安市場を或日の夕、散策中又例の新地圖を獲たのである。題して『中華民國新地圖』とあり版權は上海の廣益書局、著者は丹徒の洪懋熙先生、こは別段たいした深い意味のあつて對外的に敵意を挿し挟ましめやうとか、排外氣分を煽らうとか云ふ八釜しい目的ではなく所謂一種の愛國地圖と云ふに過ぎぬものであらうと思ふ。がその編輯の大意を見るとその中に能く我が全國の人士をして悉く中華地圖の缺陷を知らしめ相與に奮勵以て此の國耻を雪がしめよ云々の激勵の辭が掲げられてゐたり、又竊かに杞憂を抱き爰に我國の屢次喪失の土地を詳細に圖解し記入し觀る者をして列強侵略の迹と國勢陵替の由來とを審かにするに便せしめん云々として歐洲大戰からヴェルサユ凡爾塞會

議、太平洋會議以後の大勢をも説いてゐるのである。この種の地圖に見る文字はいつもさまつてゐてこゝに事新らしく書き立てる迄もないのである。又その文句を見たからとて別に神經質になるの必要もない位であるが唯參考の爲め事實ある通りの地圖面に見えてゐる丈の所をこゝに紹介して見よう。

一 日本の島國のところに見えたる朱字

イ、琉球 光緒五年滅於日本とあり

ロ、臺灣 甲午之役割與日本とあり

ハ、朝鮮 甲午敗績。許來獨立。宣統三年併於日本とあり（半島全體に日屬朝鮮の黒字を入る）

二 菲律賓のところに見えたる黒字

美屬品宋とあり（美とはアメリカ美國の義）

三 露領西伯利亞のところに見えたる朱字

ニ、沿海州 咸豐十年喪失地、吉省舊壤とあり、咸豐八年喪失地、黑省舊壤とあり、康熙二十八年劃定中俄國界（俄屬西伯利亞の黒字を入る）

ホ、中央亞細亞 同治三年塔城約失地とあり

ヘ、巴勒喀什湖 同治三年前國界とあり

四 安南のところに見えたる朱字

ト、トンキン東京 光緒十一年淪於法とあり（法はフランス法國の義）

チ、河内西方 光緒二十一年喪失地とあり

五 緬甸のところに見えたる朱字

リ、緬甸暹羅の北部光緒二十年眞緬甸界約喪失地とあり

乾隆三十四年前國界とあり

ヌ、緬甸中部 光緒十二年淪於英とあり

六 尼泊爾のところに見えたる朱字

ル、東部ネパール 光緒十五年喪失地とあり

ヲ、拉達克 光緒十四年喪失地とあり

ワ、特竺乾 光緒二十二年淪爲中英兩國とあり

阿富汗地方には別に喪失地の朱字は見えないが以上の如くその支那の周圍と云ふ周圍は殆んど朱字ならざるはなしと云ふ情態である。『中華民國新地圖』の著者がその凡例に雪國耻の大文字を掲げて讀者に訴へてゐる精神は誠によく讀めるのである。懦夫をして立たしめる丈の理由はこの朱字のベタベタ入れられたる丈で十分にあるのである。又その扇子に入れられたる文字はむしろ之よりも不穩めいた文句が多いので例の旅順大連や威海衛に關する諷刺的のもの。大抵それは讀者の想像さるゝ通りのもので、かなり峻烈を極めた挑發的警語もあるのである。自分はこゝに國際の道義を思ひこの方の文句はいま掲げることゝを遠慮しておきたいと思ふ。讀者若しこの種の地圖を蒐集せんとの研究心のあるものは北京ならば前門外楊梅竹斜街、長沙なら萬福街、廣東、

雙門底、漢口なら半邊街、開封、書店街あたりに行つて漁らるゝならば譯なく得らることゝ思ふ。その地圖から滿洲に於ける喪失地圖を見、俄領なり英領なりになつてゐる部分を見せつけらるゝときは如何に悲壯なる感じを起させるか。想像がつくであらう。わけても血氣にはやる青年學生の學校參考用として之が出版發兌せられてゐると云ふその趣旨はいかにその目標の相手をよく擱んでゐるか判るのである。

ところで自分は北京に游歴中或る日、或る青年より次の如き言を聞かされたことがある。曰く、

日本が軍閥擁護の國であるとかないとかの論は別としてたしかに氣の毒なくらの日本は領土の狭い島國である。島國であるから當然對岸の大陸に食み出して來なくては行き場がないであらう。日本の島國的根性と云ふは恐らく此の大陸進出を必然の要求としてゐることそれを指して云ふのであると思ふがどんなものでせう。云々

支那はその國土の周圍が取られる丈け取られてゐる現状を見てそして日本の島國內に日本人がかうして跼蹐してゐるのを見るときにはその大陸に進出して來るのが當然でそれは止むに止まれぬ譯ではないかと云ふ見解である。これに就いては自他共に事を荒らだてゝ云ふの必要もないのである。明々白々の事である。しかしそこに平和的、經濟的、人情的の出かたをするのであるならば何の問題も起らないのであるがそれが軍閥的、軍國的のやり方をするときには毛蟲の如く厭やがられるのである。島國的と云ふことが氣持ちよく受け容れらるゝと否とはこちらの出かた次第で紙一枚の危ぶない處に在る。その間髪を容れぬと云ふ處があるのである。支那青年の氣分を忌憚なく文字上に表はして見るならば正にかくの如く看破されるのである。日本人の對支外交に注目するの士はこの間の機微な心理に注意しよくその支那青年の氣持ちなり寛容海の如き態度で之に臨んでやることは出來ないであらうか。必ずしもいつもその迎合を事とせよと云ふ意味ではない。又さう云つたことをすぐ右から左へと片付けて實

現してやらなくてはならぬと云ふ風に窮屈に考へる必要もないのである。急がなくともよい事であるからその氣分になつて平素より互に談笑裡に打興じ合ふと云ふ老朋友の關係になつておくことその點が大事な點である。それから先きの事はこゝに筆紙に漏らさなくともそれ／＼自得してやらるゝわけであると思ふのである。

たゞ吾人はどこ迄も民國青年に接して互に意中を語り合ふときは同情に充ちた温情が溢れて來なくてはならぬ。温情の極致は青年の心を動かすに足りるものである。やもすると日本人は自分共に取り合つて呉れぬ故、取りつくしまのないものゝやうに考へてゐるものもある。その處の心理を察して老朋友の氣分になりて親交を厚くすると云ふことは最もよく民國人一般の意を得る方法である。時には随分勝手な事のみ依頼して來る青年學生もあるがそこには可愛い美點として恕して見てやらなくてはならぬ所と思ふのである。

三十八 滿洲に對する日本人のメンタル・テスト

支那へ、支那へと日本人は支那への進出、發展を口癖の如く唱道するけれども實は支那そのものを恐れて怖がつてゐるものが多い。本當に支那内地まで這入り込むなど云ふ話になると始めから不安がつて實際深入りする氣持になり得ないと云ふものが少なくない。

支那の内地が悠久なる平和郷であり世に知られぬ樂土であると云ふ事實の理解されてゐないものには無理もないことであるが唯の口頭禪に終つてゐる「支那への進出」はよい加減のものど考へらるゝのである。多年新聞に雜誌に又パンフレットに著書にと「支那へ」のモットーは國是として日本では高調されてゐるが事實上支那へ渡り眞に民國人の間に交り民國人自身と交渉を結んで行く人は幾何あるか。共食などしてゐるものはこゝに論外とするのであるが、本當の意味に於いて中日双方のもので直接交渉を

持つてゐるものはどれ位ゐるであらうか、一にも二にも支那の内地が不安視されてゐることがその妨げをなし、やゝもすると都城開港地までが矢張り又不安視されてゐる。固より支那のことであるから不安が全くないなどは云へぬ。が然し自分自身に疑心暗鬼、悪心を挿んでゐない以上先づ何れの地に深入りしても安心して可なりである。自分に護身用のピストルその他の兇器をかくしてゐる如きは第一不安を自ら求めてゐるやうなものである。自分に兇器を携帯せず自己に祕密のなきことこれが最も安全なる方法となすべきである。しかしそれにしても日本人は支那内地と云へば何となく食はず嫌ひして恐れ怖はがることは非常である。今では歐米人までもやゝその傾きを生ずるに至つた。何れにしても支那内地の事情の未詳なるが爲め宛かも猛獸の村にでも這入る如き心持がしてゐるやうである。自分共平素如何にその山廓水村の人情美を説くといへども氣持ちに於いて尙どこ迄もたよりない感じのしてゐるものゝやうである。

此の故に折角長江沿岸の如き樂土の田舎のあるにしても之に向かふものが少なく、又浙江水郷の田園があつても之に遊ばんとするものはないのである。燕山楚水徒らに日客を待つのみにして日本から之に接近する爲に出かくる者が餘りないのである。支那の事情に少しく通じたるもの又支那語を多少とも話し得る者などから見るときは殆んど噴飯に堪へぬ次第であり又殆んど理解し能はざる次第である。でもいかに批評し去つても實際その心から不安がつてゐるのであるから仕方がない。長江流域を始め支那各地に日本人の数の増加を見ないと云ふ事實も、その原因がこゝに在ると考へらるるものである。固よりこゝは如何にその不安とは云へ彼地の事情を研究して見て、そしてその地に經濟發展を期圖し得るの見込みの自得される時が來るときは又格別である。そこに香ばしい福音の確實に來ることの判つた時は游心勃勃空手渡航するの徒さへも屢々目撃することがあるのである。けれどもそれさへも往々にして突發する不祥事件の爲めに懲り懲りして支那内地は到底自分共の働きに行くべき舞臺に非ずなどと

斷念し長嘆息を漏らすものがある。こは要するに支那の内地はその自己に對する生命と財産の安固を保障して呉れて居らず、たとひ官憲や法律はあるにはあつても當てになるものではなく、訴へて行つたつて何年待つても埒の明かぬのでしびれを切らせること云ふ情態であるのである。これも支那のことであるから支那に行けばそれ位は當り前の事と免疫になり心得べきである。そこになると支那内地は始めから安心がならぬと考へてゐるべきである。たとひ日本の領事館はあつても領事にばかりたよつて居れぬ。問題は自己の存立存続と云ふことであるがいくらこれはあせつて見ても焼きもきして泣き寝入りに終ると云ふが落ちであると覺悟してゐなくてはならぬのである。

その點になると滿洲である。殊に滿鐵の沿線に近い處では日本人は日本の全然延長氣分で居られるし日本人同志の共食ひをしてゐる所だけに日本そつくりの安心が得られる。生命財産も護つてもらへるし殆んど何等そこに不安がない。唯從來の日本人相互間では時々その粒について兎角の評を耳にすることもあるが兎も角も日本人自身

としては日本語で用事も便ぜられるし又和服のまゝで外出も出来てゐると云ふ情態である。これではその第一線に立つて支那人の間に交じり國際生活をなしてゐるのであると云ふ自覺は全く起らないことになる。又それでは起る譯がない。唯生命財産の安全と云ふ丈の話で本當の在外活動の意義と云ふものは没却されてゐるのである。けれども日本人が海外に踏み出して在外活動の眞の自覺を發揚しそれを安心して實現し得らるる所はと云へばこの滿洲でなくてはならぬのである。日本人の滿洲に對するメンタル・テストはこの點に如何なる結果を現はすやと問はるれば、心あるの士はこの問題こそ最も重大視すべきものであると思ふ。ところが年來の經濟不況に祟られてかそれとも在滿日本人全體の建て前に缺陷があつた爲めか、それとも又滿洲官邊の出かたに祟られたる爲めか。とにかく香ばしくない事實をのみ見聞して日本民族の對外進展の第一頁に暗き陰影を投ぜられたる如き感じを得るのである。嘗て趙欣伯博士の口よりも之が警告的忠言を發せるを耳にしたることあるが要は在滿同胞全體としての日常

生活の上に、又將來の政策の上に、否大にしては日本そのもの、將來をトする上に滿洲に於けるわが生存情態の消長如何がその尤も精確なるバロメーターたり得るものとして考へらるゝのである。

どう云ふ點から見ても東亞の島國に生を送れる我が日本人が今日の如くその支那本部の方は不安と稱して之に出かくるに二の足を踏み、又は滿洲は滿洲でそれに不安はないにしてもその滿洲官邊民間双方に對する接觸の香ばしからざる問題を醸して近くは世人も知る如き大排日の騒動を惹起したるが如きことありと云ふに至つては日本民族の支那に對する遣り方は今一段のテストを要すべく各自反省する所がなくてはならぬと痛感する次第である。

三十九 親しみ薄き日本の對支外交振り

事毎に軍事會議を開いて見たり鹿爪らしく抗議を申立てゝ見たり、法規を楯に大官

を呼び付けて見たりと云つた何となく角張つた四角四面のことをのみ堂々とやることに偉いのだと云ふ風に考へてゐる日本人にはその無雜作に親しみを以つて手軽く要領のよい處をきよりとやつて了ふと云ふ洒脱な手際は望まれにくいのである。上官の命令一下で百萬の兵でも俺が動かして見せると云ふ氣分で納まつてゐる偉ら者には矢張り八釜しい會議を召集したり法律第何條に曰くと云つた式のことを列べて見たりする方が氣持がよいに極まつてゐる。とかく法律で固まつた者は法律を笠に人間味のない應對振りを友人や親類のものにするものだから鼻摘みとなることが多い。人間味を無視して法律を振り回す者くらゐ實際鼻につくきざはないのである。

支那人に云はせて見ると日本人のすること、云ふことは多くは角がましくて刺さげしい。成るだけ話しかけられてもぎごちない氣分がしてならぬから避けて居りたい位である。たいした事でもない事を五月蠅く八釜しくせき立てる。のみならず話に又理屈が多いので聞いてゐても不愉快である。民國人はよく笑つて他を云ふ風があるが、

支那の人に向つてやんやん云ひ立てるなどは却つて事を打ち毀はすものである。さらばと云つて黙つて我慢をしてもゐられず、蟲が納まらぬ爲めに云つてしまふ。すると薩張りするのだと云ふ。これが普通日本人の氣質の特色とするところである。日本人は談判事などと來たら兎角どれ位損をすることか判らぬが損など眼中にない。仕舞ひには胸のうちがむら／＼するからツイ怒號してしまふのだなどと云ひ出すものもあるのである。

淡泊に云へば日本人は餘りに正直であり、卒直である。その相手が知らぬ人でもあると云ふと頗る冷淡であるが少し知り合つて來るとかく信頼し過ぎる所がある。そしてその正直な外に潔癖性のところがあり、男氣があり義侠心をよく出す。そして利害を超越した態度に出ることがよくある。その邊は實に愛すべく又美しい所である。ところがすべてかう云つた日本人の特性と云ふものは支那人に對して果してどう云ふ結果になるのであらうか。こゝはよほど研究を要するところである。

民國人は人にもよりけりであるが概して外交、應接、あらゆる時の人との接觸に辭令の巧みであることは今更贅言を要しないことであるが尙日本人から特に學ぶべきはその話の要領についての輪廓を輕々に鮮明ならしめないこと云ふことこれが何よりも奥の手である。こゝには支那古來の幾多の潜在せる祕訣がある。支那の人々は極めて際どい處をいつも危なく渡つてゐるやうなものでその間頗る曖昧模糊に話をぼかしてゐるやうである。話をぼやつとヌーボー式に霞をかけておき劃然たる形を見せたりしないで成るたけとぼけて居ると云ふ行き方をしてゐる者もある。

人の批評が話題に出てゐる時でも第三者の前ではそれをよくも云はず悪くも無論云はず、極めてヌーボー式にぼかしてゐる。否むしろかゝる時は黙つてゐて賛否を口にせぬが普通である。無理に聞かれても、たゞ簡單にそのときはその人の噂について

も。
「ああさうですかね！」

「僕はよく知りませぬから……」

の連發である。それも云はずして済む時は唯笑つて他を云つてゐるのみである。自分がその人と一味の黨に見られることでもあれば次の機會にいかなる運命に遭ふことか判らぬと云ふこともある。そこになると日本人は第一輪廓をばかす丈の雅味とゆとりのあるものが少ない。又明確な要領を答へる者の方がよいものと考へられてゐる。それ故支那では日本人は日本式にその確答を與へた爲めにあとで自ら窮地に陥つて困つたものがある。日本では兩端を持するなどは世間の惡む所となつてゐる位であるが支那人との交渉には常に明快をモットーとしてゐては調和がとれなくなる。のみならず親しみそのものも縁切りとなつて疎遠になる虞れがあるのである。時としては決して『否』と云ふことを如何なる場合でも云はぬものがある。原則としてその事に好意を持ちいつもよろしい、よろしいハオ、ハオ『好好』の連發である方が無難であるといふこともあるのである。日本人の外交、交渉が兎角いつも表立關からのみ堂々と成り込む

行き方をしてゐて麻雀を前に打寛ろぎ談笑裏に圓く片付て行くと云つた行きかたをする者の少ないのはどう云ふ譯であらう。殊に正面から行つて拳骨をガンと喰らはすが對支外交の要訣でもあるやうな行きかたを頌してゐたものもある。人見る所が異なり、硬で行くか柔で行くか、時と場合にもよりけりであつて一概には云へぬ。けれども年が年中硬でのみ行つて軍國主義を振りかざすのみが妙策なるが如く考へるのは自分採らないのである。

そのこれ迄の親しみ薄き日本の對支外交ぐらゐるその累を將來に及ぼしたものはない。支那に對しては支那獨特の外交振りがあるべきで歐米式でもいかず、又日本のむき出しでも行かない。要は同情と親しみ深い大きな心もて之に接するが最大眼目であると思ふのである。

四十 時代後れの侮蔑觀念

この節は討てや懲らせやの時代おくれの侮蔑觀念は東亞の天地から大分取去られて来た、が尙どうかすると日本の有識者階級の間にかへその名残りの見出されることがある。民國人四億八千萬の日本に對する最大の要求はこの觀念の徹廢の問題である。餘所ではそれは既に殆んど解決せられてゐるが獨り日本にはまだ隨分行はれ、ひどい言葉をあたまごなしに浴びせかけてゐるのを聞く。忍ぶべからざるは民國人のこの苦痛である。

民國人は白人に向つては無遠慮にかなりきつく之を浴びせかけてゐるが、日本人は白人に向つてはそのあたまが上がらぬ癖に善隣の民國人に向かつては見下げた言を吐くことがある。遺憾この上もなき事である。世界ではどこでも民國には注意してゐると見えむしろ之に敬意を表してゐる位である。が獨り日本人は然らず。民國そのものを見下げてゐる氣分が去らぬ。日本人にその氣持ち感情の去らぬ爲め民國人が日本に來ると服裝からして變へてゐなくてはならぬ氣持がしてならぬ。こは路上侮られる事

實のあるが故に支那服を脱いで洋服に代へその苦痛を脱せんとするのである。かう云つた悲哀は一日も早く國民の反省して之が除去されんことを望むや切なるものがあるのである。

日本人が支那人を見縊り少くとも之を同等に見る丈の雅量の出來ない間は日本は支那に對して本當の共存共榮の條約など結べるわけがない。日支双方本當に締結の出來るときは日本人の氣持ちがすつかり支那の民意に合致したときである。さればその侮蔑觀念の日本に存否如何の問題は即ち東亞の共存の消長を測るバロメーターであることを見ることが出来るのである。かの湖北大治に於ける民國人と西澤公雄博士との氣分の麗はしい合致融和が過去三十年間に互り蒸成せられたことは周知の事實であるが、これが爲めどれ位大治の一地點を通じて兩國共存の實が擧げられてゐることか判らぬ。この一事を見てもいかにその兩國の愛のくさびとして之が圓滿なる融合をはかることの重要視すべきか判るのである。

日本人は世界の國際舞臺に現はれてからまだやつと六十年、今後は國際情誼の方面に於いても尙訓練を要すべきことが多いのである。ツイ不用意の間に面と向つても失言することもあるのであるがそれほど心に考のあつて云ふのでもない。唯習慣的に無意識に出るのである。勿論民國人自身に於いても今少しくその向上を圖り、國際信義を重んじ國としても國際義務を果たすことを心がけてくれなくてはならぬこともある。例へばその過去に於ける多くの國際的義務を果たすことをしないでゐて唯その權利のみを主張し勝手放題をやること云ふことなど民國人自身に反省してもらはなくてはならぬ點である。民國自身が今日反省期に入るべき時に來てゐるは固より之を望むことなるが日本自身としても今少しくこれ迄の如き態度でなく之を改善、向上せしめたい事が多いのである。少なくとも來朝の民國青年たちをして日常路傍に不快を感じしめない所まで行くべきは勿論である。近年大分改められては來たが今一息きの處である。こゝに最善の努力を期するは引いて又吾人の國際的品位を高むる所以にもなるのである。

である。

四十一 百萬の良民北漸に對する日本朝野の輿論

連年の兵亂に支那支那各地の良民にしてその住み慣れた故里を去つて、滿洲の安全地帯へと北漸するもの多きを加へ來たり、最近には七八十萬を數へ本年は又百萬乃至二百萬の移住を見ることならんかと取沙汰されてゐる。その移住する者の中には一時的に動亂、掠奪の厄を免れんとする者もある可く又中には故郷の産を擧げて引揚げ親戚故舊と永久の別れを告げて本當に縁を切れるものもある。これらは所謂流民とか氓民とか云ふものでなく宛ら植民の形にて移住をなせるもの。むしろ移民と云つてしまつても宜しい位のものである。

今支那住民の心理に就いて少しく考へて見るに支那人は日本人と著しく異なりその住心地そのものに就いては窮屈なる執着を持つてゐない。その南洋であれ日本であ

れ、アメリカであれ孰れの地點にでもその自らバイオニアとして出掛けて行つた地點を見出さばそれを自己の郷土と化する力と根氣には非常なものがある。その到る所青山ありとはよく支那住民の移住性を物語つて居るものと云へるのである。そのたまには經濟生活を超越して種々な關係から祖先以來の樂土を棄て、他へ移る能はざる事情のものないではないが、多くの住民はその經濟生活、經濟活動に就いて多大の興味を持ち、その苟しくも自信のつきたる職業を見出し得べき天地の示さるゝ時は萬難を排しても倦まず弛まず堅忍不拔なる民族性を發揮するのである。その意味に於いて廣東福建より、南洋馬來に移住するものゝ多き毎航郵船舷頭にデツキバセンジャーの群を目視する一事を以つてしても判るのである。又その成功せる華僑の多きは既に世界の植民史上でも珍らしく一大異彩を放つてゐるわけである。

今や滿洲は民國移住民の經濟生活を遂ぐるの天地として恐らく第二の南洋と考へられて來たやうである。從來の山東移民、山東出稼ぎの隆盛なりしに加へて近來は支那

本部各地より雲霞の如く陸續蝟集し來たりつゝあるのである。固より滿洲の天地は南洋の如く熱帯としての恩恵に浴することは出來ないまでも、その能く生命財産の保障を確保されたる日本の庇護があり、又その支那本部に在りても最も惡んでゐた所の苛斂誅求の點も左まで苛酷と云ふでなく加ふるに南支と同じやうに水田のよく開けて耕農の事の大分相似て共通なるところもあり、それに就き鮮人の開墾せしもの多かりしも鮮人自身は最近朝鮮へ向け逐ひ返されたるもの頗る多きに似たり。かくて恐らく從來支那本部で塗炭の苦しみにのみ呻吟してゐた者にとつて滿洲の天地はどれ位結構な樂土と見えてゐることか判らぬ。何を苦しんで動亂の中原に居残つて耕耨の事に従はんやなどと嘯いてゐる者もあるであらう。民國住民が滿洲の野を以つて第二の南洋と化せんとするに至るは遠きを待たないであらうと云はれてゐる。現に此の勢を以てすれば數年を出でずして五六百萬の良民を受容れることこれ亦火を睹るよりも明かなことである。

さて此の百萬の良民北漸に對する支那當局自身の考は如何なるものがあるか、自分は未だ之が具體的の資料を手にするに至らないのである。が嘗て山西太原にて閻錫山大人に面晤のとき大人は山西の人口一千二百萬のうち年々歳々減少しつゝあることを語りその原因が飢饉と出水氾濫にあることを述べてゐたことであつた。支那關内より滿洲に流れ出る良民中にはこの山西よりするも幾何ありやその處の統計を有してはゐないが恐らく北支、中支の各省よりそれぞれ相當數十萬を繰出してゐることは想像に難くない。これ等の移住民は恐らく誰れ人から一度の移民植民の論を聞かされたものでもなければ新聞によつてその必要を説破されたものでもない。自らその各止むに止まれぬ事情より自分にたゞ思ひ立つたと云ふ者のみである。山東の出稼の如くその親方青班式のものゝありてあたまを刎ねて行く組織になつて居るか否かは確かめてゐないのであるが思ふに滿洲流出の事實は矢張りかゝる組織のあつて潮の如き勢もて一部民族的の移動の行はれつゝあるものと見ても差支ないのである。

良民の北漸にはかくの如くして恐る可きものがあり、その結果は將來の滿洲に取つて侮る可からざるものとなるのである。日本では此の現象に對して極めて少數の専門家の間に多少論議されても居るやうであるが普く日本朝野の輿論とはなつてゐない。日本の朝野は選舉のことにでも没頭すると國民のあたまが肝腎の對岸のこともお留守になつてしまふ。徐ろに日本の滿蒙方略のことも朝野に十分に練つておかなくてはならぬ問題であるが今は全く對岸の火事視されてゐる。とかく日本は議論倒れの國でもあるか法理論や對策のレクチュアとなると盛にやるやうである。けれども人民自身われ自ら進んで滿洲の野に經濟生活の基礎を作るべく出かける者はあるかと云ふ段になると少ないのである。こゝには滿鐵の勤め人になつたり滿鐵庇護の會社員になつて行くものを指すのではなく自ら腕に汗して直接支那人と交渉ある仕事に打込むと云ふものを指して云ふのである。又それ丈の覺悟をきめ決心するものさへも極めて少ない。唯その總べての人にその滿洲の野が日本の延長と云ふ氣分がある丈であつてその

支那領土の第一線に立つて活躍するのであるこの氣分が働くものは少ないのである。

滿洲所感について述べたい事は無限にあるが要するにその在滿の支那人と交渉のない生活をしてゐる日本人の今日多い事は無論でこれでは在滿日本人の第一義を解決してゐないと云ふ氣がしてならぬ。日本人は生活の程度は高いしバイオニアとしての資格には上品過ぎる者のみ多い感じがしてならぬ。北滿の支那良民は生活程度は低く而かも口に一片の植民論を高調するでなし常に不言實行で以つてその移住するものに百萬を突破し潮の如く押寄せてゐるのである。支那人の目より見れば同じこれ中華民國の領土内。何の憚る所がこれあらんと我が物顔に大舉移住してゐるのである。日本の『滿蒙特殊地域』も結構であるが日本の朝野そのものには支那良民程の團體的の熱が伴つてゐない。時には東都に滿洲に對する輿論も起きないではないが、唯一時的に花火線香式たるを免れぬ。奉天に未曾有の排日事件の勃發して守田民會長の歸朝、朝野に獅子吼せられしことありしも殆んど、そは糠に釘の如くその利き目は見えな

つた 日本人の滿洲に對する興味は勿論輿論の起らないのは如何なる理由によるものであらうか。恐らくこれは朝野一般の之に對する理解のなきに基因せる譯でないであらうか。

ところが支那良民たちはすべて實行的である。日本人が唱へる對滿政策や輿論の有無なんかに拘泥することなく全然之を超越してたゞ水田の耕すべきは耕し着々自分の仕事に之を納めて隠然相寄つて一大勢力の地盤を作りつゝあるの觀がある。事實この數で以つてこなし來る支那北漸のなだれの移民は議論倒れの日本の對滿策や名論卓説の長廣舌に勝ること數等なるを知るべきである。日本のかゝり合ひも何も知らず、知らぬが佛でどしどし乗込んで行く南方良民の北漸法は實に最後の勝利者としての桂冠を得べく、これは南洋華僑の實例に徴しても明かなことである。日本の滿蒙特殊對策なるものも之が存在してゐるなら、あるらしく之を民衆化して實際的に實現の出來るやうにならしめなくては唯机上の論として了ふだけで何の事やら譯が判らぬのであ

る。

四十二 時局の恐怖から無策第一主義の日本

支那に對して若し本當の策があるならばその策が一々あるやうに見え透かされる事は策の得たものでない。むしろ無策第一主義の名に於いて通つてゐる然るべしである。その無策としてばかりして大きく出てゐる方がどの位ゆとりがあつて宜しいか知らぬ。下手に劔を抜いて脅かし付けて見たりなどしても焼石に水、その時限りの効果でも見られたらまだよい方である。しかしそれも大局に亘つて達観して見ると他の地方全體に排日の憂き目を見てゐるのに比べて見てどれ程の損失になつてゐることか判らぬ。大局の上の大きな經濟を無視してまでも各分の爲めには劔を抜く可き場合もあることはあるであらうが、さらばと云つてそれが苟しくもされては困る。威武を示すのもよいが全體に亘つての在支日本人の被害、惡感、打撃のことを考慮して慎重にやつ

てもらひたいものである。

然るに又人民の方では時局の影響を受けて支那各地方の實情を調べることもしせずただ時局なるが故に之を恐れすべて中止する、延期するとして唯無暗みに時局にかこつけて一時を糊塗せんとする者がある。日本人はとかく口癖のやうに時局、時局と時局を口實に萬事計畫を中止、延期せんとする傾があるがこれは支那人の目から見ると贅澤と見られるのである。いつになつたら止むやら判らぬ時局の騒動を口實に肝腎の計畫を中絶せしむる如きは探らざる所であるとし支那人は平氣で事を遂行の出来るだけ遂行して行く。時局を恐れて無爲傍觀してゐる如きは力と勇氣のないものであるとする。支那にゐる支那人は一々中絶などして待つては居れないのである。一部北漸移住するものはあつても大部分はそれごとくそれ相應に策を案じ方法を講じつゝあるのである。何ぞ時局に恐れて計り居られやうか。勿論口の上、筆の上には獅子吼を試み塗炭の苦しみに耐へずして云々の形容詞も列べ立てるであらう。しかし仕事は仕事として

遂行して挫けることなどはしないのである。と云ふのは支那良民にはその民族性の上に又その日常生活の上に止むに止まれぬ強い所がありそして反面に又その毎日の氣分の持ちかたの上に悟つたところがあるのである。されば、

一、時局であらうと掠奪が來ようといふ濫が近づかうと周章狼狽をしないところのこれらの實況を見る時は感心の外ない。

二、愚人か大哲學者か何れとも判らぬ位、時に物欲を超越して了つて大磐石の態度をとり唯機械の如く同じことを繰返してゐて神經質な表情をしないで平氣な態度でゐるのである。

支那に對する對策はそのどこ迄も大陸的に又悠久なる態度で以つて臨まなくては嘘である。固より一時的の出來事は刹那刹那で出來得る限り手取り速く片付けておかなかつては後など云つてゐては絶望のことが多い。がそればかりでなく支那の事は引取に限らず交渉ごとはすべて曰く云ひ難い所がある。その明確に云へない所に味がある。

その味を自得して臨機應變に出ようとするのであるが、要するにその奥底の知れるやり方はすぐ見透かされて了ふ。支那人の目先きはそこに又よく利く。人の足許を見透かすことや相手の弱點急所を洞察することなどは特に手に入つたものである。

同じ日本の對支方策でありながら若槻内閣のときと田中内閣のときとどうして一定した方寸の下に出られないのであらうとはよく聞くところである。前者の政策が非なりとして後者がかく積極的に出て政策の改善をやつたつもりであるかなどからかひ半分足許を見透かした言を弄してゐる者がある。その消極であらうと積極であらうと支那自身には關する所ではないのである。無策な積極は却つて兩國の親しみを破壊することはあつても決して好しみを増させる所以ではない。そこに民國人自身から見解せない所がある。もし日本朝野の間に對支外交の確立すべき必要があるならばなぜ、政友内閣の民政内閣のときと一黨一派の爲めの對策でなく如何なる内閣のときでも一定不易のしつかりした政策が確立されそれで終始すると云ふ事にならないのであらう。こ

これは日本朝野に要望したい最大緊要事であり、又東亞の平和の爲にも望ましい事である。民國人から見たる日本朝野の對支外交がその邊に何等かの曙光も見出し得ないと云ふ事は頗る物足りなく感ずる所である。

思ふに民國人はしよつちうの事であるから時局を時局として恐れず、着々その進む可き路を進みつゝあり、その北漸して行くものは行き、留まるものは留まりてその經濟生活に又歡樂生活に活躍しつゝあり、日本は口に親善を唱へ共存共榮を高調しながら人民は時局を口實に恐れて近寄つて來ず、政府は政府で時々支那輿論を無視して無名の出兵に極度の排日を買つて見たり長江筋の大きな貿易を希ひつゝも山東に之が打ち毀しを斷行すると云つたやうに無策の上塗りに是れ日も足らぬことをしてゐる。これで日本の賢明な方策が樹立されたと見らるゝかも知れぬが支那朝鮮の士から見れば全然反對の批評しか下されてゐないのである。對支外交に興味を持たるゝの志士はこの點について如何なる感想を持たるゝや。虚心淡懷以つて互にその意中の腹藏なき所

を披瀝し合つて見たいと思ふのである。

四十三 國民外交と接觸の要諦

支那に行つて支那人の自分共と接觸してゐる時の氣分、態度、言辭、聚餐を見るとそのすべてに互つて考へて見るに、その一人として國民外交の機微に牴觸して利己的我利我利に見えるやうなものはない。たまに碼頭の苦力や惡車夫などあつてもこれは論外である。多く山廓水村に接する所の田夫野人にしてもその心事は正にこれ立派な私設外交官としての役柄を勤めてゐるものと推獎せられるのである。少なくとも自分の體驗に基づく範圍内ではかゝる好印象を與へられてゐるのである。これは僞らざる告白である。支那は辭令に巧みな國で巧言令色、仁すくなしと昔しから云はれてゐるがその國民外交の要領は實に手に入つたものである。誠によく訓練されたものであると云つてよろしいのである。

ところが日本人の外交振りはどうかと云ふと先づ第一日本の官設外交官にしたころでまさか位階勳等の鼻眼鏡にぶら下げてゐる譯でもあるまいがいやに外交のことは俺の掌中に在るのだぞと口吻に漏らすばかりでなくその態度の見透かされてゐるのも氣付かず努力してゐらるゝ者が多い。如才なく碎けて居れば當人も氣取る必要がなくて氣も樂であるに、御苦勞なことゝ氣の毒に思はるゝ仁が多いやうである。その巧言令色のない所は却つて仁の内容の多いことを證する譯かも知れぬ故敢て云々はせぬが支那民間の外交振りに比べて著しく段違ひのあることに驚かざるを得ぬ。これと云ふのも日本では役人計りでなく國民一般に他國人との接觸振りは得意の方でない。よしや言葉が軽く行く者にしても氣分や經驗がどうもそれに添ひ兼ねる。言葉の點をよく日本人は口實にしてゐるが元來はその性質の加減である。言葉はよく繰れるのでも接觸振りの滑かに行かぬものが多い。日本人同志列車中に乗合はせても連日互ににらみ合つて一言も交へぬ事がある。

日本人はとかく知つてゐる人同士は又格別にも懇意に話もし打碎けもするが知らぬ人となると硬く青竹のやうになる。容易に相も崩さず笑ひ顔もせぬ。何だか怒つたやうにつんどしてゐて物を聞いても碌に返事もしない。かく迄して見えを張る必要はないのであるが必要不必要の論ではなく生れ乍らの持前である故致しかたもないのである。されば支那人に對する時の如きも兎角一種の感情を以つて臨むものが未だに減らない。知らない支那人に對するとなると殆んどみじめなものである。民國人がこぼしたり憤慨したりするのも無理のない話である。日本人は果たしてこれで朝野擧つての大陸政策など實現が出来るであらうか。國民自身に今少しく國際國民としての修養、經驗を積み又その條件を具備するやう努力するの必要がありはせぬであらうか。日本人の歐米人に對する方面はとも角も少なくとも支那人に對する平素の國民外交と云ふものは支那支那人が日本人に對するに比し遙かに劣つてゐて及ばない處があるやうに思はれる。

日本人のこの國際接觸の要諦が理解せられぬ限りいかに立派な對支外交の形式が文字上に綴り上げられても所詮それは形骸だけに終り血あり肉のある人間味本位の外交とはなり得ないのである。日本と支那はその單なる日支兩國政府同士の外交面だけでは兩國の氣持ちを打込んだ眞の外交にはなり得ない。本當に兩國の心と心との暖かい外交はどうしても双方の國民同士の接觸、親交によるものでなくてはならぬ。民國人から見たる日本の對支外交は特に此の點に重きがおかれてあるのであるから日本朝野の士もかれの長を採り我れの短を補ふの心掛けがなくてはなるまいと思ふのである。

四十四 日本の新聞に誤られたる日人の對支感情

日本へは上海北京あたりの漢字新聞がそれ程多く來てゐない。それ故支那内地の事情と云つても日本の新聞に採録せられたものから知らるゝ外ない。日本の新聞を見ると近來は特にその記事が殺戮味を加へ來たり曰く、強盜七人切り、曰く鬼熊退治、曰

く飛行士の慘死、曰く鐵道自殺、曰く無理心中、曰く何。と殆んどかう云つた三面記事かさもなくば動運競技記事と言つたものに限られてゐる。選舉政治議會のきはものもあれど國民教育資料としては多くかく慘殺記事が重きをなしてゐる。そこへさして日本に知られた支那記事と云ふものもその大半が戰爭記事か政争記事のみである。いかにその殺風景なたねでなくては日本では歡迎されぬかと云ふことがこれで判るのである。

しかし支那は國土も廣く又社會も複雑であり日本の社會に直接必要であり又裨益する所の多い興味ある出來事はどれ位あるか判らぬのである。支那社會の人情美、新しい出來事、支那人の日本に對する憧憬などにしても日本人に知らせておきたいと思はるゝものは随分あるのである。支那南北各地の戰爭だねよりも實はかう云つて特だねの方が日本朝野の士に知られてほしいのである。日本人が支那を理解せず又之を侮蔑してゐるわけも色々あるであらうがたしかにその支那側に好感を寄せしむるに與つて

力ある材料が殆んど日本の新聞に出されないと云ふことにも関係がある。これがどれ位又残念なことであるか判らぬ。つまり日本人のあたまを従來の戦争聯想ばかりでなく今少しく平和的な又悠久なる資料によつて入れ替へさせなくてはならぬのである。日本人の對支感情を改善せしむる方法には色々あるであらうが、此の方面から手を付けることも慥かに一策である。従來こはあまりに明瞭なことであつたけれどもその點を指摘せるものがなかつたのである。

要するに日本人は日本の島國のうちばかりに鎖ぢ籠つてゐて遠く國外に出て見ると云ふことをせぬものが多い。従つて自國の自慢をしたり自惚れが強くなつたりするのみで自分自らを第三者の地位において觀察して見ると云ふことをしない。一步でも外に出て見るといかに日本は物足りないか。日本人にはいかなる改善を要すべき所があるか、手にとる如く判る。民國の青年たちに云はしむればいくらでも日本朝野の士の對支外交に就いて嫌らず考へて居らるゝことがあるであらうと思ふがこゝには自分は

半ば民國人となり民國人の立場から日本を考へて見た觀察を出来るだけ率直に述べて見たのである。日本人は時々かうして違つた立場からあたまの動きかたを變へて見ることが他山の石として必要なことにもなるので、その大要を思ふがまゝ述べて江湖の士に訴へる次第である。

十 長江江邊影薄き邦人の地盤

四十五 核心にふれぬ外交官の會議振り

應急の問題として長江江邊より引揚げ歸朝せる避難民に同情し且つは帝國の臣民の活躍地帯としての長江江邊が危険區域となりこのまゝに放置するときはいづ歸還し得らるゝことか判らぬとの事に立脚して之が復舊に應急的後援をなすことの協議を始めとし、支那南北各地の當事者よりその在任地を中心としての外交事情の聴取と云つたことが主要なこととして東方會議が催されてゐた。これによつて根本方針が立つなどと今更に考へるものもあるわけはなく、今又急に新たに根本方針を思付くなど云ふことも妙なわけである。内閣が變らうが變はるまいが日本と中華民國との善隣關係に變化のあるべき筈はないのである。

一局部に武力の威光を示さうと考へて採つた行動が全國的に反感的排貨抵制の運動となりて現はれたるを遺憾としてゐないものはないらしく、その邊に就いては大分婉曲に噛んで含めるやうに説いてゐた總領事もあつた。永年支那民衆を相手に難局にあたり千軍萬馬の間を切りぬけて來た老練の闘士ばかりであるからその邊の呼吸は判つてゐないものではなく、その間の永遠の對策ぐらゐも心得てゐない筈はないのである。しかし大體が事の經過を述べたり大體論を遠廻しに云つたりするもののみで長江江邊影薄き邦人の地盤をいかにすれば否支那全體に對して如何にすれば邦人の發達に有望なる前途を持ち來たすやうになるかの核心にふれて述べ立てゝゐるものは不幸にして見當らなかつたやうに思はれた。

政府の方針とか政府の對策とかいつても政府々々と政府のみを解決の唯一の關鍵の如く見る思想は自分はどうかと思ふのである。日本人としていつも自國の政府のことのみを考へてゐるところからして南方支那に對していつも又南方の政府のみ相

手取り武漢政府（陳友仁だとかボロヂンだとか）のこのみに重きを置きたがる癖がある。それで事が解決して行くものゝやうに考へると誤りが生ずる。いかに陳友仁が引受けたとてすぐその晩からでも引くり返へる事がある。すぐ裏切られて取りかへしのつかぬ事にもなつた例がある。政府過重偏重の思想はいつも對支政策を不益の底に陥らしめてゐるのである。それはそれとして日本人自身の問題としてもいつもこれ亦帝國政府にすべてを縋らうとする長い間の因襲でその他の方法を考へる氣持にさへなつてゐないのである。問題の核心は常に必ず人にある。渡支邦人、在留邦人自身にあることは火を見るよりも明かなることであるがそこを突刺して云ふものゝゐないのは遺憾である。問題の中心は人にあり、人の決心、人の向上、人の實力、人の腕前如何にあるのであるがそこを殆んど誰れも觸れずして支那側の正規軍を云々し又政府を云々せんとする。政府も又あまりに平素から政府の訓令、政府の命令と政府風を吹かせ過ぎる所もあるからでもあつたがその邊が少しく中心を失つてゐる、見當ちがひの

會議になつてゐたかのやうに考へられてゐるのである。親善共存の標語や武力使用云云の言動は抑も末の問題であつて元來は在留邦人自身の問題に就いて先づ討議反省すべきことがどつさりあるのである。その核心にふれずに所謂外交官的方面の考慮をいかに多く費してもそれは際限のないことと考へらるゝのである。事は甚だむづかしい問題であるが當局者の方にしても人の問題であり居留民の方にしても人の問題である。この人の問題といふことが一種謎の如き問題ではあるが一番大事なこととなるのである。

四十六 非常なる決心を要する長江の歸還

今まで支那に於ける邦人の慘事も度々繰返されたものであるが民國十六年三月二十四日の南京事件と四月三日の漢口事件といふが如き身震ひのする非道な目に遭つたことはなかつた。その他長江各地に於ける在留邦人は四川方面のものを除き何れの地に

在つても宜昌、沙市、長沙、常德、岳州、九江、蕪湖、鎮江一つとして危険を感じなかつたところはなかつたのである。南京濟南の兩不祥事件の如きはその真相の全部が日本内地の一般に公に報道されてゐない爲め十分の輿論の起るまでに至らなかつた。けれども事は日本帝國の威信とか民族的發展とか八釜しく言ひ立てゝ見ればいくらでも日本人として我慢の出来ない事があるのである。又誰が見ても支那側に恐ろしい残忍性を發揮した事實のあることは争はれないのである。たゞ日本は英米列國と共に之を餘りにきつく難じ立てないまでの事である。

山東に對する日本の出兵はこれが反映として止むなき行動に出たものであらうとは察せらるゝがしかし之をそれと察するは日本人なるが故に察する丈の話で支那青年たちは一人として之を天秤にかけて考慮して見ようと云ふものはない。南京事件や濟南事件のことは殆んど勘定のうちに入れずその方面の日本に對する思ひやりは少しも少ない。そして唯出兵反對の叫びを擧ぐるといふ始末である。

自分はこゝに何等出兵について辯護するのではない。又之を辯護するの理由をも持たぬのである。しかし南京濟南事件の慘狀に就いてたとへそれが暴民どもの仕業にもせよ遺憾の意ぐらゐるは表しても構はないだらうと思ふがそう考へるものがない。ないところに支那の支那たる所が看破せられるのである。

しかし政府筋のものがいかに遺憾の意を表したり以後再び繰返さぬことなどと言質を取つて見ても、あれは一文の値打ちもない。いつ何時又之を繰返さぬとも限らぬ。かやうな危険區域に向つて一旦折角日本まで引揚げた連中が再び家財をまどめ歸還するやうな時節が来るか、どうか頗る疑はしい。よほど物好きな細君か、それとも國思ひの女丈夫ででもなくては一寸死地に態々歸つて來るといふ氣持になり得るわけはないと思ふ。これは非常な決心を要することである。大抵細君の里の方で、老母たちが死地としての長江の沿岸に歸るなどは絶対に反對するのである。その爲めたとひ歸還の氣持がしてゐても子供までつれて支那に再び舞ひ戻つて來ることは容易に行へない

ことになるのである。

どうせ海外といふことであるなら南洋とか南米とかその財産の安固を保障してくれるところに出かけるといふは人情である。支那は近いところだとは云へ、これでは叶はぬといふことになる。その點からいうて滿洲の滿鐵沿線ならば大丈夫といふことで最近の滿洲は大した景氣であると傳へられてゐる。長江江邊から邦人の影の減じて行くことは實に惜しい氣持がしてならぬ。あのよい長江の眺めは邦人の爲めにどの位大陸氣分を味はせる上に役立つてゐるか。そこへ行くと獨逸系の猶太人などは長江のさわぎにびくともせず、そのまゝ取引を続けそして何等恐れてゐない計りでなく、此の度のやうな列國引揚後のよい利得ある仕事は今この時とばかり大車輪でやつてゐるとはうらやましい感じがしてならぬのである。

今日の漢口の如くその現銀集中條令を撤廢もせずたゞあのやうな紙屑同様の中央銀行のペーパー見たやうなものを受取つてゐる取引振りは再開しない方がよいと考へる

のは無理もないことである。現銀集中條令の出で以來又土豪劣紳條令の出で以來武漢の天地は實に廢墟の如き觀を呈してゐる。これで武漢の將來は一層ひどくなる。漢口の商取引が見込み立たずといふのは之が爲めである。

日本に引揚げてゐた漢口の避難民達は政府の多少の涙金ぐらゐるが分配されて見たところではいつになつたら取引の復舊を見ることが出来ることやら……一層かうして日本に無職宙に迷ひながらブラブラしてゐる方がありました云々と悲觀してゐるものもある。どのつまりは漢口に歸つて行くべきわけであるがかうした同情すべき勇士の面々がかなりゐるのである。

四十七 外交官と居留民との心理的相違

すべて役人をしてゐるものは獨り外交官と云はず身にいつも月給なり年俸なりがつつて廻はつてゐる。その爲め在留民によく引揚命令などを出して體だけの移轉を

させる。商取引が出来てこそその地にゐる値打ちのあるものを、生命が助かることのみ重きをおき移轉せしむるというて多くのものが不平を云つてゐる。曰く、「役人どちがひ、からだ丈、生命丈の救助、移轉は意味をなさないのである。むしろ死んだも同様である。」云々

役人はからだ一つでいづどこへ行つても身に月給がついてゐる。自分共は所が變つてしまへば、蟹が手をもがれたも同然であるといふのである。商取引に就事せるもの云ふ位のことには外交官だつて分らぬのではないと云つてゐる。しかしその痛みを痛切には感じない。丁度そは我が子を失くしたことのあるものでなくては眞にその時の悲しみの深さが判らないといふのと同じわけである。子を亡くした人に同情の語を物語つてゐても本當に子を亡くしたことのあるものでなくては本當の理解がないものである。外交官の心理はいかにどう云つてもそこまでは到らないのである。又一々小商人などの掠奪に遭つたものの心と同じ氣分になり、腕まくりしてどなり込んで来る

といふやうになつて見たつて仕方もないがその間の心理に非常な相違のあることは争はれぬといふことをいふのである。

外交官としては本省の訓令もきゝ對支那當局者側の氣分態度行きがかりも考に入れ大局の上からやるのであるからさうその腕まくり連中の言のみに耳をかしてゐるわけにもいかないのである。その點から云ふと總領事諸君の苦衷は人一倍お察しするのである。三方四方から板挟みとなり結局何れの方からもよくは云はれぬ。そこによくすれば家族からの非難も来るであらう。漢口の總領事の君が決して孫子の末までも外交官なんかには……とさしむかひの君に述べたとは有名な話だが實に同情を禁じ得ないのである。

又居留民同士の間にしても會社員銀行員と小商人ともとの間には心理作用がちがふ、それこれその立脚地がちがつてゐるのだから必ずしも之をどうと一様に批評するわけにはいかぬ。その爲めかどうか、ともすればあのやうな大不祥事のあつたあと意

見の不一致立脚地のちがつてゐるところかしてあのやうに態度のまちまちで群雄割據の概を示してゐるのは實に行つて見て案外に感ぜられたのであつた。

四十八 長江に根をおろす前に邦人の反省を要すべき點

日本人はやゝもすると支那に投資すること、人物をやることさへしてゐれば相當結果を擧ぐるにきまつてゐるものやうに考へる傾がある。それにちがひはないのであるが支那のことは何としてもその他に今一つ大きなことは對外的宣傳の一事である。内部的の必要なることは云ふを俟たず、必ずやその之を對外的に立派に又實際の力相應に宣傳をする心がけがなくてはならぬ。宣傳を差控へ遠慮をしてゐるわけでもあるまいが、とかくその方では支那人の下風に立つてゐる。これは紡績騒ぎのときでも著しく日本人側は劣つてゐた。あの紡績騒ぎは日華兩民の宣傳とても云ふべきものであつた。たしかにあの戦では日本側資本家側の失敗であつた。

元來日本は正直なところがあつて正しい事をさへしてゐれば人が知る。我れが知る。神が知るといふやうに教へられたものである。むやみに、八釜しく廣告したり賣名をしたり宣傳がましい事をするの必要はない。心に疚ましからねば天に恥ぢず地に恥ぢず云々といつてゐるのである。それにちがひはないのであるがとかく宣傳は餘計のことを考へ又それに費用を投ずることも無駄なやうに考へるくせがある。從來支那の事業の巧にいかないのも一つにはこゝに原因があるとも云へる。これは元來柄にないことで下手にやると逆に支那人に利用されるかも知れぬ。支那人がその側の巧みなること天才的なることは驚く可きものである。さればこれはとてもかなひなしと云ふものもあるが凡そ支那で事をなすものが之を眼中におかず無視してゐるといふことはさなきだに影の薄き長江筋の邦人の勢力をいやが上にも薄くしてしまふ虞があるのである。日本人の將來は時勢と共に進んで行くためにはこの缺點弱點を自覺しこの方向に向つて留意し大いにその點に攻究實行の實を擧げて行くやうにすることが何より大

事なごとく考へる次第である。

日本人の支那に於ける發展について自ら反省すべき事柄の數々あるうちに宣傳の事以外更に申述べべきことが心理的方面に色々あるのであるが何れ又稿を改めてゆつくり述べることをする。讀者幸に之を諒せよ。

十一 動亂の支那より歸りて

四十九 日本人の豫想を裏切る動亂の支那

動亂は支那のつきものであると見られ又恐れられてゐる。之を恐ろしいなどと、思ふてゐる間は支那の視察は出來ぬ。といふことは、餘りに支那を見縊つたやうな又あまりに支那に對し無頓着なやうに聞えるであらう。しかし支那といふ國は、實際本當に平定し、本當に安定を得るなどいふことは求めんとしても求む可からざるものである。

支那を視察するには、必ずしも動亂の中に身を投ずるといふ必要はない。支那は國がひろくして動亂のない静かなところは、いくらでも残されてゐる。

實際支那のうちで、その騒いでゐるところといへば、あの廣い全面積に對して九牛

の一毛にも及ばぬ位のものである。日本の新聞のみを見てみると、その活字を大きくして、その戦争記事を出してゐる爲め、いかにも大變な騒ぎの如くに見え、又その動亂が支那全國津々浦々にひろがつてゐるかの如くに取られてゐる。しかしこれは新聞記事に吞まれて了つたものの考へる所の考へであつて、事實はそれほどまでの事はないのである。大抵支那の戦争のあるところといふのは、その場所がきまつてゐる。戦亂地帯といふ所が大凡そ出来てゐる。その筋に當つてゐる所の住民、良民はこまるわけである。けれども他の地方のものは比較的何ともない。たゞそこに苛斂誅求さへ高飛車に來なければ何の事はないのである。徵發を食らつたり苛税をせしめらるゝ良民だちこそ同情に價するが、その他の地方のものは存外平氣であるのである。視察旅行をするにしても、自分ども、その時を構はず、又その時節に拘泥せず歩いてゐるが、殆んどいつも安全に無事に漫遊が出来てゐるのである。

日本に歸つて之を友人共に話すると、えらい不思議さうな顔をして見てゐるが、

全く支那は、戦争の爲めに旅行が出来ぬなどいふやうな窮屈なケチな國ではない。長江の下流地方に若し戦争があるにしても、上流の方は平穩無事で、何の事はないといつた調子である。江蘇浙江地方が麻の如く亂れてゐるときでも、四川は何事もないといふ時が多いのである。又南方の諸地方は騒いでゐても、北方は危険がないといふやうに、確かにその時局に關係のないところは、即ち安全地帯となつてゐるのである。旅行に就いて、自分は時局の爲めにどうと云ふ事なく、屈托なく、いつも出かけてゐる。がいつも幸に危険な目に遭はずして歸つて來る。動亂は新聞に傳へてゐるほど恐ろしいものでなく、實地に行つて見ると張り合ひ抜けがする位のものである。よし又日本で、八釜しく傳へられてゐても、その時にすぐ出かかると、丁度支那についた時分には暴風雨のあとみたやうに何の事もなく静かになつてゐるのである。されば無暗みに恐れ、引込み思案になつたりしてゐるのは、實際自分に云はせると意味をなさぬ事と思ふ。

固より無謀な支那旅行は戒しめなくてはならぬ。飛んで火に入る夏の蟲をきめ込まなくてはならぬといふことはない。大事をとる事に細心の注意を拂ふ丈の必要はある。必要はあるがその爲め用心といつても用心倒れをして、遂に支那の本當に治まるべきといふを待つてゐるなどは、遂に百年の河清を待つと同じことになるのである。この邊はよくよく考へて、いかに支那の舞臺にはゆとりがあつて、いかに廣大であるかを察しなくてはならぬ。そこを見ぬくことが、先づ何より支那を見る上に大事なことであると信するのである。

五十 古より訓練された動亂除けの一般習慣

支那は動亂の多い國には違ひないが、その代り又支那位その住民に平和性があり、呑ん氣な悠暢な氣分で生活を營んでゐる處はあるまい。もし一方に戦争の恐怖心が深刻に來てゐるのであれば、今少しく周章狼狽した態度にでも出るとか、力を入れて戦

争防止を講ずることをして然かるべしと思はるゝが、その邊に就いては、依然何の用意もしない。又自然の勢で天下を搔亂してゐるものに對しては、之を惡んでゐても、如何とも良民達の方で出來ない場合が多い。その戦亂のある地方の沿道にあたれるもの、またいつも被害を蒙り塗炭の苦しみを嘗めてゐる所のものは困り抜いてゐるのである、けれども、心から諦めさせられてゐるせいか、たいしてこぼしても居ないらしく見える。そして戦争は戦争だ、自分だちは自分だちだと全然別個の事として考へてゐる。

動亂で困らさるゝものはその地を去つてわきに逃げ移りさうなものであるが、良民たちは矢張りもこの場所に必ず歸つて來る。住めば都の意味と解せらるゝ。かやうな風に良民だちの動亂を見ることは、他國民が戦亂を見るよりも輕いのである。これは長江の夏の氾濫を見たり、北支那で孟夏の頃に起る蒙古風に對して、平氣でゐられるのと似たやうなものである。そこも外人から見ると、それには堪へられぬものだと思

るが、支那人どもの無頓着さ加減は驚いたものであるといはれてゐるのである。

南支福建廣東地方からは、支那を飛出して南洋馬來の地方に出かくるもの多く、又赤道直下炎天燬くが如きところで大分經濟的發展を遂げ大成功を収めてゐるものが多いが、これとても支那の動亂を避けたが爲めにこゝに移住してゐるのではない。南洋は南洋の別天地に、支那よりもより以上の支那延長地帯の實を擧げること努力してゐるのであつて、心持に於ては、決して之を外國視してゐるわけではないのである。支那内地にゐるのと同じ氣分で、平和なる開拓に従事してゐるのである。

支那の人々は、一方外界の刺戟に對しひどく八釜しく騒ぎ立てるところもあるが、又反對に殆ど無神經のやうに構はないでゐるところもある。矛盾の多い民族性を有することは顯著なものである。といふのは、動亂の支那を巡つて見るといかに支那人がその自治、自衛の道に長けてゐるか、戦時の被害をいかにして少なくしようかといふことに腐心しつゝも、而かも尙割合に平氣でゐるものが多いには我れながら感心せ

らるゝのである。戦争防止、内亂防止のことは如何ともなしがたい。民は苛斂誅求を厭うてゐるに違ひないが、積極的にどうといふことは、武器を持たぬ良民だちのことであるから仕方がない。所謂メイファーツ没法子であるのである。たゞ、

- 一、なるべく税を出さぬ工風をすること。
- 二、徴發に應じないこと。
- 三、臨時軍費の徴收に對しては忌避すること。
- 四、恒産を地下に隠匿すること。
- 五、滙豊正金その他の大外國銀行に預金しておくこと。
- 六、當局の役人たちを買収しておくこと。
- 先づかやうなことを考へるより他に方法はない。最後に止むなくんばその、窮餘の策として、

七、祖先以來の地を人に譲るなり、放棄するなりして、上海天津の租界、又は大連

の租借地に移住して來ること。

八、租界も不安と思へば、日本の別府その他へ亡命して來ること。そして時機を見て又再びもとの地に歸り得るものは歸ること。

これらの方法によるのであるが、これもよほど事實はむつかしいので、大抵は戦争のある地方は困つてゐても左程氣にも病まず、

「待てば海路の日和あり」

で、呑ん氣に構へてゐるのである。然らば實際に就いて、その果してそれ程危険の迫つて來てゐることが多いのであるかどうかといふに、必ずしも然らずである。

一、戦争の流言蜚語が前ぶれるにひろがることがあるけれども、遂に何事もなくして済むことがある。

二、北京の空から爆彈投下を斷行するなんて、先年、一時は奉天軍の物凄まじさを傳へるものがあり、在留日本人などもかなり恐れを抱き、人心恟々たるものが

あつた。けれども當日の朝になり號外が出た。見ると、

「今日の奉軍の爆彈投下は都合により日延べとなれり、市民諸君安心して可なり」云々。

といふのである。

かう云つた調子であるから動亂など云つても互に心得たものである。固より安心は出來ぬと思つてはゐる。相當まさかの時の準備はしてゐる、第一遁げ仕度のつもりであらうか、支那人の家庭はなるべく、原則として荷物を少なくしてゐる。昔しからその目的に叶ふやうに簡易生活を營み、家具家財をなる丈殖やさぬ仕組みにしてゐる。社會の習慣がそれであるから要領のよい事、夥しい。その代りに食つたり飲んだり云ふ料理の方のことなどには、かなり複雑な美味を探り得るやうにしてゐる。長い間の經驗からして、いつでも動亂に備へ得る丈の生活法を探り、それが普通になつてゐることは、よくも訓練されたものである。國家總動員の代りに、國家社會全體が亂を

忌避するの方面がいはず語らずのうちによく出来、よく用意されてゐるわけであるのである。

五十一 動亂の砲火をくゞりて

度々動亂時やら平時やら、その時を定めず、支那視察に出かけてゐる自分には、支那の時局なんてそれほどに危険視する気分にもなれないのである。かなりひどい時であつても、多少神経が慣れて、麻痺して來たものか無頓着でゐられるやうな氣がする。

最近民國十六年の孟夏、南軍側と北軍側が江を挟んで戰爭中のときであつた。自分は日本から態々見えられた侍從武官小山田繁藏少將の長江を上下せられ漢口まで慰問に出かけらるゝのにお伴して行を共にしたことがあつた。南京や漢口の掠奪事件直後のこととて、日本人間には相當長江の聯想は香ばしくない時であつた。のみならず、

南北對峙の頃のこととて、かなり物騒な感じをその陣營の北岸五色の民國旗と、南岸の青天白日旗との間に興へてゐるのであつた。長江の或る部分は夜間の航行を禁じてゐるところがあり、又外國船であらうと支那船であらうと敵船であらうと何等見さかなく發砲する恐れのあるときであるから、運わるく流弾にでも当たればそれなりである、心配して來れば際限はないのである。

そして吾人の長江遡江のときに受けた砲撃の場所は、

一、キャンイン江蔭のしも。

二、鎮江のしも。

三、シャークワン下關と浦口の間の上。

四、田家鎮附近。

であつた。氣まぐれに打たれるのであるからたいしてむきになつて見る必要もない。たゞ用心してゐればよろしいのである。しかし汽船には彈丸が当たつて機關長の室の

ドアを貫くとか、破片がデツキに落ちてゐるとかするのは見た。又その命中して船側からバチン、バチンとえらい音をさせて弾き返されてゐる響きを耳にしたこともある。けれどもからだには命中しなかつた。又長江を下るときには漢口上海の間の六百哩を僅か二十八時間で下つたのであるが、驅逐艦隊は千谷司令の下にハス・ヨモギ・タデの三艦で下つて來た。そのとき漢口、九江、蕪湖まではよかつたが、南京のしもの

五十二 三稜洲の太平洲

の沖合に假泊してゐたところが、ひどく南軍側から砲撃を食らひ始めた。出来るだけ我慢をし打返さぬつもりで唯サーチライトで暗を照して形勢を見てゐるだけであつたけれども、南軍は少しも發砲をゆるめないものである。

打ち始めると、立てつけに打つ。こちらは探照燈でどこ迄も照らして見る、すると、時々太平洲の楊柳の下から火花が列んで一例の體形をとり、ピカピカと光つて發

砲してゐるのがよく見える。かなり距離はあつたけれども、よくこちらに當たるのである。流れ丸であるか、時に艦壁に命中した弾の響きは

バチン、バチン、バチン

と氣持ちよくと云ふのはあとで云ふことで、その時は一種變な戰時氣分を唆られたのであつたが、よく當たるのである。

こちらからも遂に應戰の意味でもなかつたであらうが、かなり大砲やら機關銃やらを打ちかへした。翌朝あかなくなつて太平洲を出て上海へ向け下江したのである。司令のいはく

「あまり頑強であつたからこちらでも機關銃の九百發と十二センチの砲彈十發を見舞つた。南軍は恐らく五百發以上射てゐたであらう」云々。

多分こちらを暗みのことではあり、孫傳芳軍の軍艦ぐらゐに見まぢがへて打つたもので罪はないのである。けれどもかゝる場合に流彈に當たればそれきりである。決し

て喧嘩にはならぬ。あとで談判などして見たとても始まらぬのは、今迄のすべての交渉事件に照して見て明かなことである。支那のことはその場で片付けなくてはあとでまごめてからなど云つてゐては全部臺なしにされる。又ほとぼりのさめてからは何と云つても問題にされないのである。

支那動亂時に於ける自分の支那游歴はこの時が一番戦時らしい気分であつた。けれども軍艦に乗つてゐた爲めでもあらうが、左程に怖いものとも思はれなかつた。それで時々軍艦のドアのそばに斜めに立ち發砲の様子を邪魔にならぬところで見てゐたのである。何れにしても運の悪いものはいつ打たれて死ぬるかも知れぬ。又奥地に入りて四川省の三峡方面でも有名な四川の土匪の爲めにヤントチ羊肚溪その他の地點で、いきなりポンポン砲聲を聞くこともある。打たれたらその時である。船には鐵板の用意もしてある、日清汽船でも他の汽船でもそれ丈の備へは出來てゐるからして心配はないのである。これ計りは戦時でなくともいつ何時勃發するか判らぬのであるか

ら、十分その用意丈は施されてあるのである。決して上流だから下流だから、又平時だから戦時だからといつて心に油断はしてならぬのである。支那の旅行ではいつでもそのつもりでゐさへすれば間違ひはないものである。厄介と云へば厄介だがさう云つた國なのであるから仕方がない。支那は國土が廣くて戦争や土匪の出沒に無關係のところは澤山あるのであるが、人はとにかく支那といへば、全部擧げてその修羅場たり土匪馬賊の巢窟たりとのみ見てゐる傾のあるは實に殘念である。

こは宛かも支那にゐる支那人が、支那に渡つてゐる日本人が、いつも香ばしかぬ事を敢へてしてゐる爲め、動もすると日本人といへば人格のあまりよくない人間に見さげて考てゐる傾がある。それにも拘らず、一度日本に渡つて、日本各地で色々の階級の日本人に接觸して見ると存外日本人には親切な人、存外人格の高い人、教育ある奥ゆかしい人もゐるといふのでツイその豫想が裏切られたといふことをいふものがある。全くそれである。とにかく日本人にはあまりに支那を以て動亂國と一概に見縊び

り、そこにゆとりをつけて考へることの出来なくなつてゐる感がある。

自分は支那から歸國する度毎に人から質問をされる。

一、支那は何うなるでせう。

二、支那は危険でせう。危ぶまなくはなかつたですか。

三、よくも切り抜けて歸つて來ましたネ。

これは支那歸朝當時人から聞かると當套語であつて、ちやんと一種の型になつてゐるのである。勿論これも挨拶の語見たやうなものであつて強ひて深い意味がこれにあるわけでもないであらうが、事實常識として誰れしもこの程度の考であるのである。

自分が上に述べたやうな、かなりひどい實彈に見舞はれることもたまたにはあるのであるが、それは強ひて好んでその實地を見るべく、その範圍内へ自分で飛込んで見たから、かゝる危険な目にあつたのである。けれども支那はひろいから、いかに動亂のときといへども、平和なところはいくらでもある田舎の方に這入るときは、隔世の

感のする所があり、何の事はないのである。

勿論南方には近頃ロシアの共產氣分の横溢してゐる所もあり平和なやうに見えるても、思想的に變化してゐる所もあるのであるが、全體としては、今日の支那は、その天地山川の靜かなる如く、社會的にもまだ、呑ん氣な空氣を見出す所が多いのである。唯遺憾なのは、とかく日本から乗り込むものの態度如何といふ事である。動亂の支那を疑つたり、怖れたりするよりも先づ日本人の出かた、日本人の態度、日本人の支那人に對する氣持を省みて見ることに、その方面に今一層國民的の態度を改善しなくてはならぬのである。これは何でも話のやうであるが、頗る重大視すべき問題であると信するのである。

十二 支那南方の社會に見る土豪劣紳

五十三 土豪劣紳の意味

長江方面に國民黨の勢力の擡頭して來て以來頻々として各地に於ける有産階級のものが財産一部或は全部の沒收をされたり或は殺害その他の酷刑に處せられてゐる話題を耳にする。自分が今次の廣東武漢長江各方面視察中に於いても湖南長沙に於いて學者として清朝以來尊敬を受けてゐた葉德輝先生の殺害せられたる又漢口支那町永和號といへる有名な錢莊の老舗が百萬弗の財産を沒收せられたる如き何れも兩湖地方武漢政府の土豪劣紳懲治條例に照らされ罪を論ぜられたる結果たること云ふまでもないことである。

土豪劣紳の語は國民政府共產氣分の横溢するに至り始めて聞く最新式の熟語であつ

て南軍進出以來各地民衆の間で最も快感を感じる音調であると思える。尤も各地とも有産階級のものには土豪劣紳の名のもとに少なからぬ脅威と迫害とを受け常に家宅搜索を受け或は縣黨部とか高級黨部とかに告發せらるゝ憂き目を見るのであるから之を恐るゝことひと通りでないのである。けれども民衆工人側、農民側からいふとこの地方の豪族として高墀重壁を繞らし飛檐樓閣に酒池肉林の生活を貪れるもの或はそれ程まででなくとも界限の土豪として郷黨に推されてゐたやうなものなどは此の國民黨なり武漢政府なりの法規によつて兎に角古き過去の歴史に遡り殊更祕事を摘發し結局土豪劣紳懲治の法規に該當させるやう持つて行くのではないかと思はるゝ調べかたをして詮じつめたところ沒收又は處刑の悲哀に陥つてゐるといふ状態である。

こは一言に約して云へば舊來土豪連中が一個所に奥底の知れぬ鉅萬の財産を私有してゐるといふは天下の財貨に對する非常なる罪惡を犯してゐるわけである。どうせその富といふはもとも普通の方法で集め溜めたものでない筈であるから劣紳である。

土豪劣紳をその罪惡から救ひ清めてやる爲めの救濟事業をやつてやるのであると蟲のよい事を考へて來て罪も咎もない良民有産階級のものから遠慮會釋なしにどんどん沒收し持つて行つてしまふ。その調べる間は封印を貼付され自分の財産でありながら手をつけさせないやうにされて了ふのである。しかのみならず主人は拉致され人質に取らるることもある。どどのつまりは沒收と殺害の大手、搦め手で來るのであるから遁れようがないのである。されば南支各地の有産階級豪族どもがその南方政府を恐れきらつてゐること蛇蝎の如く中には仕方がないとして氣の速いものは武漢の天地を遁げ出さんと早手廻しに財産をまとめ隠して長江を下り上海に來たつて租界内に居を移し之を避難所とし自己の生命と財産の安固を計り武漢の地獄へ歸らうなどいふ氣分はなくなつてゐるのである。

土豪劣紳狩り出しの法規は武漢政府側でやつてゐただけで澤山であると思つてゐると今新たに又南京の國民政府の方にもその處分の統一を圖るためとて『土豪劣紳懲治

條例』といふものを制定することとなり民國十六年五月、法制委員の羅志希、胡漢民等の手で作製せられたといふ草案を見るに至つた。そのうちには土豪劣紳の名目に該當するものは次に列記する事實のありたるものとしてゐるのである。即ち、

土豪劣紳

一、家族或は自己の勢力を盾として郷土にて我儘の振舞ひをなし平民を欺壓し死亡せしめ或は傷害を與へたるもの。これに該當する所の土豪劣紳は犯罪の輕重を別ちの左例によつてそれぞれ罪を論ずるのである。

甲、死亡せしめたる者は死刑或は無期徒刑に處す

乙、傷害を與へたる者は刑律の各本條に照し一等を加へて罪を論ず

二、民刑訴訟を挑撥し中間にありて包攬し詐欺取財をなせしもの。これらの犯罪者は二等乃至四等の有期徒刑に處し並びに財産の一部或は全部を沒收す

三、孤弱を欺凌し婚姻を強迫するもの

この犯罪者は一等乃至二等の有期徒刑に處す

四、勢を恃み官吏を威迫し一定或は不特定の處罰をなすもの

この犯罪者は三等乃至五等の有期徒刑に處す

五、強迫を逞うし衆を恃み地方公益及び建設事業を妨害するもの

この犯罪者は三等乃至五等有期徒刑に處す

六、公共機關に盤據し公金を消費し或は名義を假借して財を歛め己を肥やしたるもの

この種の犯罪者は左の例に照して罪を論ず

甲、十元以上、五百元に満たざる者は四等或は五等有期徒刑に處し並びに一千元以下の罰金を科す

乙、五百元以上、千元に満たざる者は二等或は四等有期徒刑に處し並びに二千元以下の罰金を科す

丙、千元以上、三千元に満たざる者は一等或は二等有期徒刑に處し並びに六千元以下の罰金を科す

丁、三千元以上の者は死刑或は無期徒刑に處し並びに其の財産を沒收す

土豪劣紳の名を冠せらるゝ範圍は國民政府にて大要かゝるものとしてゐるが、その土豪劣紳の既に以上各級徒刑を判決せられたる者は一律に減刑すること得ずとあつたり、又その本條の罪を犯せる者は全部公權を終身剝奪すとあつたり、又もしその犯罪の未だ本條令に規定せられない者は暫行新刑律に照らし一等を加へて罪を論ずなどといふことがある。又別に『反革命條例』といふものがあつて凡そ土豪劣紳の中國民黨に危害を加へ國民革命の事業を破壊する行爲のありたるものはその反革命條例に照して罪を論ずるとあるのである。

かやうな風でもかく此の土豪劣紳懲治條例の草案は十五個條より成り立つてゐるが武漢政府で行つてゐるものよりは餘程緩和されてゐるもののやうに察せらるゝので

ある。しかし何れにしても一度もし土豪劣紳呼ばはりやをされたならばその人間は最早や社會的に致命傷を受けたことになるわけである。

五十四 土豪劣紳に對する社會的思想の反應

支那はどの地方をあるいて居ても見るのであるが特に河南省の田舎をあるいてゐると、曠漠たる大平野のうちに一段目立ちて處々に樹林で取圍まれた大規模の土塼付きの邸宅を仰ぎ見るのである。そしてその邸宅には望樓があつて特に高く聳え千里の外を展望し得るやうに出來てゐる。恐らくこは地方豪族のうちであつて河南の名物土匪襲來に備へるための設備なのであらう。一個村數個村のうちには必ずかうした大きな住まひがあつて旅行者の目を引くのである。山東地方をあるいて居るとその土豪のうちが土匪馬賊に襲はれたか、恐ろしく破壊されその周圍に繞らされた高壁の煉瓦塼の一方のそつくり崩されてゐる光景を見ることがなどもある。これらは汽車の窓から見て

ゐるだけでもいくらでもその實例を指顧することが出来る。安徽から江西の田舎の方に這入ると又亞字形といはんか亞の字の上半の恰好をなしたすてきに高い白堊の壁が邸宅の前方又は側面に蔽ふてさながら土豪の邸宅の防禦線に作られてゐるやうなのがある。

かういつた景色を支那中原の各地で見せつけらるゝ度毎に自分共旅行者の目には、かやうなことをしてゐては當然土匪馬賊には固より一般土民のいざといふ時の目的物になりはしないかと思はれる。何等怨、罪のなきものでもその主人公の轎子驢馬で外出するといふやうな時、その子郷黨と豫めぐるにでもなつておき、よくない事でも一芝居打つて見んかといふやうな心のむらむら起ることがないとも限らぬ。民國十二年の五月の臨城事件の如き大仕掛の芝居でなくともやらうと思へは何時でもやれるんだと云つた氣分を唆つてゐるやうなものである。又四川省に行つて見るとそこには重慶からかみ江津、瀘州、江安からあの邊りの一帯の山上山嶺には例の山寨の土豪が雲

上の生活をなせるものが澤山ある。かれ等の年中いつもその心配になつてゐる點はその土匪に狙はれるといふことこれである。支那ではその平地に居ようとも山地に居ようともその邊の患ひ氣がかりの種子はいつになつても止む時がないのである。されば山上生活にはなるべく險固要害なる絶域の地勢を擇ばんとし又平地にてはその千里の外を遠望し得べき望樓をなるべく高く築き上げようとしてゐるのである。その間の苦心悩みといふもの蓋しひと通りでない事は察するに餘りがあるのである。

支那ではたとひその一地方に於いては德澤が治ねく行渡つてゐても他の地方から流民どもの來たりて突然之を夜襲するやうなことがないとも限らぬ。良民だから必ずそこで安心でありいつも人望があるとはいへぬ。いかなる時にいかなる災難が勃發するか判らぬのである。その如何に評判のよい土豪であつても當局者の方でその財産に目をつけて來るときは如何なる口實如何なる手段に訴へて之を掠奪或は沒收の暴行を敢行するに至るかその邊の事は支那のことだから全く判らないのである。その人がそ

の地方の土豪であるといふことその事が社會的思想の上から見て何となしに之を打ちこはして見たい之を沒收して見たい又之を分配せしめたいといったやうな變な社會主義的氣分を唆つてゐることは誰しも考へらるゝ現象であるのである。

かやうな意味からいつて支那にはいつの時代にもかうした破壊的分裂作用の氣分を起さしめてあとに何物かを生み出させようとする底力のある活動が起つて來る。此の度の革命軍國民政府のなせる土豪劣紳條例の精神氣分はたしかにこゝに胚胎してゐると見なくてはならぬのである。こは又その社會主義として社會意志としてかゝる傾向を持つといふことは當然の趨勢である。殊に近代の如く新しい思想の横溢し漲つて居る時節に於いては之を拒み阻止する譯にはまゐらぬのである。

たゞ田舎の奥地に於いては支那四百餘州各省とも同じやうに必ずしも近代思想の影響を受けてやるといふのでなく傳統的にこれ迄の支那の古い社會的行きかたでやると見るべきものかも知れぬ。しかし湖南湖北とか南京地方の如き開けた地方に於けるこ

これらの條例は全く世間でいふ社會政策に合致した所の一反映と見ても差支なからうと思はれるのである。

五十五 土豪扱ひの一般に及ぼす影響

支那ではさなきだに富者に對する一般プロレタリアの反感が社會的にある。その階級觀念も相當に強い。中には無自覺に先祖代々貧者は貧者で來てゐるものもあるが時としては驚天動地的に一朝にして有産階級を覆へしてしまふといふものもある。そこへ差して此の度の如き土豪劣紳扱ひをして有産階級を侮りにくんだ政策をとるときはその影響は恐ろしいものがあることゝ信するのである。現に錢莊の永和號の老舗から百萬弗を沒收した政府の突如的彈壓手段の如きはこれが爲めに何時ぞこの金持でもやつつけて差支なしとの空氣を作つたのである。

支那ぐらゐる世界にその各人が自由我儘の出來る國はないので嘗つて自分が四川省地

方の奥地にその實地を踏査してゐたときのこと萬縣で聞いたことである。萬縣梁山地方にありてはその土地の督軍階級の福利きの連中は城内にあつて勝手氣儘なことをなし城内にある新婦、婚禮直後の花嫁の如きをどこからか臭ぎ出し之を部下をして狩り出さしめ我が物がほに側に侍らせておくのである。御用があるからとていきなり連れ出して新夫の抗議も何も物ともせず傍若無人の怪しからぬ事をなすに至るのである。又は勝手に拉致し人質に取つて來るのである。また若しかりにそれに對し故障でも申立つるに於いては逆にいくらいらの身の代金を持つて來いと出られるのである。こはまさかに督軍級のものゝなす仕わざに非ず、恐らく土匪級の手合ひのなすことであらうと思はれる。土地が土地だけに梁山伯あたりのやりさうなことである。萬縣から梁山にかけては今日は桐油だの紙だの色々よい物産も出てゆたかなところであるがかうした物騒なことはそれと沒交渉で行はれてゐるのである。

かくて女の狩り出しであらうと土豪の財産であらうと之を物にしようと思ひ立つた

ら何一つ出来ぬことはない。出来ないならば出来るやうにする。力づくでもやつつけてしまふ。それ故に南京事件などで米國居留民の夫人どもが随分ひどい目にあつて凌辱されたり色々のことのあるあつたといふのも固より珍らしい事でも何でもないのである。支那人にしても若しその土豪劣紳呼ばはりをして勝手氣まゝな仕打ちをされるといふことになれば之には全く抵抗のしようがない。むしろ土豪劣紳だから殺害してもかまはぬ、人質に拉致して來ても構はない、財産を失敬しても構はない、といった破壊的な無暴なことを當然の仕打ちであるとして考へるやうな空氣が生ずることになる。こゝが一番恐ろしいのである。昔しから此の類の氣分は支那の或る社會には存外に濃厚たつぷりとある處へさして愈々以て此の度裏書きされた形になつたわけである。思ふに土豪扱ひの現代化はこれから益々ひどくなることであらう。

支那では社會が自分自らそのよく改造されべきものは改造されその社會が自ら進むべき路はよく自ら進む。敢へて之をはたから心配しなくともその社會の大きな意思か

ら支配されて推移しつゝあるわけであるからかく土豪の狩り出し行爲の如きも自然の理法によつて行はれてまゐつてゐるものと見るべきかも知れぬ。丁度從來舊王朝の倒れては新王朝の立ち、皇帝の政が棄たれて民國の政治が始まるといふことにもなつた。敢へて今こゝに土豪側に味方して世の中をはかなみ支那に新しい社會政策の行はれてゐる大潮流に對し之を非議するものもいらぬことかも知れぬ。しかし何れにしてもその空氣の濃厚になればなるほど土豪連中は田舎にゐられなくなり上海天津の租界に逃げ出しそこで生命と財産の安全をはかるの外なくなることになる。或は亡命して日本の別府の温泉にでも來るべきものかも知れぬ。吾人はどこ迄もこゝにその土豪扱ひをされてひどくやられてゐる事の影響が今後益々支那人心に及ぼす所のもの甚だ大なるべきを憂ふる次第である。

五十六 支那の土豪劣紳懲治條例に就いて

支那の國は不文律の八釜しい國である。成文律なんかどうだつてよろしい。いよいよ自分がやるつもりであれば土豪條令にどうあらうといかに抗議を申立て、見ようとするんな事は云つて見る丈野暮。全く純然たる切り棄て御免の國である。土豪條例に何とあらうとその條例を見て味ふなどいふのは土豪側の人間の氣休めにやる丈の事であつて沒收する方は命令一下すぐその日にやつてしまふ。しかしそうはいふものゝ南京で見るとこの土豪條例の末段のところを見るとかういふことが記されてある。

(冠省)

一、被擧發人が地方特別法廷の初級審判を経たる後若し之に不服あらば十日以内に申明し、省特別法廷に向かつて上訴することを得、中央特別法廷は之を最高受理機關となす(第十條)

一、凡そ地方或は省特別法廷にて死刑を判決せるものは中央特別法廷の同意を得たる後始めて執行することを得、

凡そ各級徒刑を判決されたるものも亦同時に中央特別法廷に呈報して以て隨時取調べを便にすべし(第十一條)

一、被檢擧人は定罪後各級法廷より其の他の司法機關に移送して之を執行する時は各該特別法廷より員を派して會同監視す(第十二條)

一、凡そ挾嫌誣陷し或は故意に不實のものを檢擧するものあらば、刑律の誣告罪を以つて論斷す(第十三條)

一、本條例の解釋及び修正權は中國々民黨中央執行委員會政治會議に屬す(第十四條)

一、本條例は公布の日より施行す(第十五條、完)

などといかにもよく出来てゐるのである。固より國民政府が土豪劣紳懲辦の條例を發布するは黨治精神の發展、民衆利益の保障の爲めに制定し發布するものであるから之を苟しくもしないことは云ふまでもなく之を實施するに當つても頗る大事をとつてゐるやうに記された所もある。例へば

一、縣黨部(市黨部、省黨部など種々あり)或は高級黨部は人民の舉發を接受したる後證據を調査し若し十分なりと認むる時は正式會議の通過を経て地方長官に通告し被檢舉者を先づ逮捕することを得、拘留は三日間を越ゆるを得ず、その期限を越ゆれば被檢舉人或はその親屬より特別法廷に告訴し懲戒せしむることを得(第四條參照)

このやうな體裁のよい事も規定されてゐるのである。尤も至極なことである。法の運用の人にある事は固より何れの國にしたところで同じわけであるが支那では最もその點が大事な點である。といふのは民に法律思想の普及してゐるわけでなし、普及してゐたとしても之に臨むものが絶対の力を以て彈壓的に行けることは殆んど神の如きものがある。こは蔣介石が最近上海に隠れたる共產黨の殘黨を彈壓銃殺せしめ又蔣介石の幕僚李濟琛が廣東にてクーデターを行ひ二百五十名のこれも矢張り共產黨連中を銃殺したる如きその國策の發動といふことになれば幾萬人を坑にすることも辭しな

いのである。又昨年張作霖が北京で社會日報社主林萬里翁(自分の趣味の友)の執筆せし社説の露國革命思想に對する張作霖の彈壓主義とかいふ意のこの掲げられたるを見るやその翌すぐ命令一下、北京天橋路で銃殺させて了つた事實もある。實に支那社會の實相は之を穿つて云へば法文などは唯メンツ面子の爲めにおかれたる國家の飾り物たるに過ぎず、時と場合によつてつまり都合のよい時、之を翳す道具に使ふ丈のことである。之を翳して都合の悪い時は之を超越して自己の意思により命令一下絶対の權能を以て之を施行してしまふのである。若し前後の都合上殺害して此の世に在らしめない方が策の得たるものなる場合は或は之を列車中に暗殺するなり宴會に招いて毒殺するなり或はその茅廁に出かくる處を突差させるなりその方法はいくらでもあるのである。そしていはく、彼れは昨夕より行衛不明なり云々と、流言蜚言を放たしむ。それで終りである。民國初期に於ける西太后、光緒帝乃至は袁世凱の最後の如き今以つて謎の幕とされ北京紫禁城内の秘史とされてゐるのもこの消息を如實に物語つ

てゐるものである。

されば今は國民政府側革命軍方面に行はれつゝある土豪劣紳の法律、それから今將さに行はんとする條例の如きも實はその成文の如きはどうでもよろしいのである。要は之を運用する人に在る。その人は絶対の力を以て彈壓的に之を行ふ。之が爲め長江一帯の空氣を一層險惡ならしむることがなければ、よろしいと思ふ。世は貪官汚吏のゐて是が非でも條例を盾にとつて私欲を満さんとするものがあり、否古來の役人にはそれが多く滔々として皆然かりと云つてもよい位に良民側からは視られてゐるのである。土豪劣紳懲治條例は之を發布する政府側の氣持ちはどんなものであらうともこゝには良民側から見た所の感じを率直に云へば上に述べる如き範圍を出でないことと考へられる。若しこれがどこ迄も正しくこの法の如く律義に行はるゝものとすれば天下の奇蹟である。そしてそれは一時的の現象に終り結局はいつしか又例によつて例の如く之を行ふ人によつて殆んど法文はあれどもなきが如きものに至るのではないかと考

へらるゝのである。

五十七 支那國民黨の印象

南京に現はれた三民主義(民族、民權、民生)の國民政府は武漢政府の事實上の共產主義のそれに對しやゝ天下の人心を集め武漢政府があまりに極端なやり口に愛憎をつかされて來た丈それだけ南京の方は穩健を以て目せらるゝに至つた。今や時の勢を見て武漢政府が頻りと我が政府は共產に非すとの宣傳をなすを得策となし辯解頗るつとめてゐる所があるやうであるが、そのひろく湖南湖北の民間工人農民間で植え付けたる惡思想は之を禁止する方法もないことになつてゐる。支那全局面から見てもその武漢政府のやりかたは良民側から見ても蛇蝎視されてゐるのである。殊にそのうちでも此の土豪劣紳呼ばはりをして殆んど亂暴の限りを働き彈壓政策をとるやうに取られてゐる。そしてそれは武漢地方内外人の等しく認めるところで今日之を蔽はんとして

も蔽ふ可からざるものとなつてゐる。されば今頃になつて武漢の政府は共產政策をとれるに非ずなどと極言宣傳するやうなことをしてゐる。その土豪劣紳の名の下に良民有産階級をむやみに虐げて一層評判を悪くしたものを又々三民主義の南京政府が態々受繼いで之を發布強行せんとするはこれ亦地方良民有産階級の間に名を落とす所以の道を繰返しつゝあるかのやうに思はれるのである。既に南京政府は上海の總商會の會頭傅筱盦の逮捕令を出してその財産の沒收を計つたりしたのを始めとしその土豪條令發布の裏面にはかなり複雑した事情の存することは看破せらるるのであるが要は上にも云つたやうに之を運用する人とその人の精神とに在るのである。國民政府革命の大業をなすに妨をなすやうなものは之を土豪劣紳と目して處罰するのであるからかくの如きは湖南農民協會の規定にその拒否してゐる有識階級、僧侶、尼、學者、布教師の如き又多くの地主の如き、その他有産ブル階級のものすべて之を社會革命の敵となしてゐる心理とこれとはよく似てゐるのである。吾人は國民革命軍の爲めに又南京三民

主義の政府があまり現下の急迫を切抜けんが爲に土豪劣紳懲治條例發布の事に心急ぎ信を良民から失ひ天下の怨府となつて武漢政府の二の舞をやることのないやうに望まざるを得ないのである。

吾人は中華民國の民意を察し且つ隣邦日本人の老朋友としての各地良民の心中を忖度し此の度の三民政府が土豪呼ばりをして信を國民から失ふやうな方法をつとめて取るやうな段取りになつたことを惜しむものである。これは支那在來の法を超越して權威者が專斷的に暴壓を加へ彈壓政策により殆んど勝手氣まゝを行ふ過去のやり口を憂ふるのあまり自分は婆心までに切言する所以である。若しそれ法の施行、中庸を得てむやみ矢鱈に逮捕令、沒收、殺害のデゴマ的手段に訴ふる如き非行がなくなれば幸であるのである。

十三 支那上流の家庭

五十八 支那上流社會の生活

支那の上流社會とはどの邊を標準にして云へるか。判然と中流下流から區別し得る界は何か。これは難かしい問題である。支那には從來中流社會がなく、あつても甚だ少なく上流からいきなり下流にうつつて行くと云はれてゐる。又下流から一躍して上流階級になると云ふ見方も出来ぬでもない。布衣の身から一舉皇帝になつた例も古來求むるに苦しくないのである。必ずしも遠き漢の武帝の例を持つて來なくとも近い處にそれに似た例のあることは天下周知の事である。支那の上流と云ふことは單にその身分の高いところのみから律するわけにもいかぬ。が、しかし身分の高下と云ふことよりも支那の如き形式の八釜しく出来てゐる所では或る程度まで不斷の毎日の生活の

高下によつても判定せられる結果になつてゐる。

前清朝の時代であると其の社會組織の上に貴族社會なるものが存してゐた。これは清朝の初期に於て既に大清會典や大清會典事例などに於いて明かにその制度が規定せられ、且つ親王以下、貝勒、貝子、鎮國將軍、補國將軍を始めその貴族級の順序も嚴重に出来てゐた。その滿人の朝廷であつた丈に滿人側に對しては偉く都合のよい典型も出来てゐたのである。今も尙肅親王府、恭親王府、醇親王府を始め禮親王府だの毓朗貝勒だのと色々の舊清朝時代の貴族のあとを遺つてゐる。空な身分様式ではあるがそれそれ過去の貴族として社會の一部ではまだ之に尊敬を拂つてゐるものがある。廣東や華僑(南洋在住)あたりからさへあの宣統皇帝の紫禁城脱出蒙塵的一幕の際にくらでも慰問金を續續電報爲替で送つて來たものさへあつた位である。思想の新しくなつてゐる廣東でさへも面白いものでそこには矢張りまだその舊貴族なり舊王室なりを懷ふの念に強い固い處のあることはこれででもわかるのである。

また今日孔子の子孫としてその血統の正しく續いてゐる山東省曲阜文廟内衍世侯府の孔令貽は既に數年前に亡くなられ當主の衍世侯府の嗣子はまだ十歳になるかならぬかの少孩兒であるが此の曲阜の孔夫子孫の家こそ萬世に傳ふ可き所謂上流貴族の典型として第一に數へられなくてはならぬのであらう。少なくとも爲政者側から云ふとどうしてもこの孔夫子の後裔は最も理想的のアリストラテイクの階級たらしめなくてはならぬ、上流家庭でなくてはならぬものである。

若しそれその祖先が名流學者であつたとか聖賢偉人であつたとか政治家であつたとか文人であつたとか云ふことでその子孫をすぐ貴族扱ひにすることの可否は研究の餘地があるものと思ふ。近くは北京にも明の楊慎の三十五代の子孫の楊獻谷君が居たり又清、鄧完白の五代の孫の鄧初君もゐる。明王陽明あたりの子孫も今日浙江省餘姚の龍山山下にゐらるゝかも知れぬ。さう云つたものを悉く今貴族だの上流だのと一々きめて了ふわけにもいかぬ。曾國藩、曾紀澤、の後はどうであらう。李鴻章の後はいか

が。袁世凱の後の袁克定はどうであらう。支那社會の實相より考へて見ると、支那では上流と人も許し自分も許すものである爲めには先づ次の件々を少なくとも必要とするのでないかと思ふ。

ともかく祖先、或は中興の祖に社會上身分地位のよかつた人の居たこと。又その記録の嚴として残つてゐること。その正しい證據を持つてゐること。

祖先の立派な墓陵を有してゐる可きこと。又家廟、宗祠の立派なものを有してゐる可きこと。

子孫に美田の残されたるものなくともそこに恒産あり恒心あるものにして上流の面子を維持してゐる丈の暮しをなせること。その生活振りのなつてゐないものはたとひ門に、『君子不憂貧』など大書してゐても誰も顧るものはない。

その里閭、自治體の中に在りて巍然たる樓閣、橋界はなくとも相當の構へ院子高壁を持つこと。

新舊の如何に拘らず相當の教育があり修養を積み文字を解してゐること。

藏書、碑碣、古玩又は花園、蓮池影壁などを有してゐること。

數へ來たればいくつも條件となるべきものがあるであらう。このうち第一の祖先の問題であるが、これは證據人のない事ではあり且つ記録は支那人の間では學者をして捏造假作せしむることが多い。家名を飾り自己の面子をあげる爲めに祖先を美にし之に刀筆の吏を用ひた例はいくらでもあるから、餘りに當てにはならぬ。しかしさう云つた事に社會が熱心になるだけそれだけ第一條件として大切なことである。城内進士弟の扁額を門に掲ぐるもの多きは人のよく知る所である。湖南長沙の『葉德輝翁』などがその書齋で自分と古を談するときなどよく宋書を繙いてその祖先についての記録のあることを指摘詳述するなども確かにその間の消息を物語れるものである。第二の墓陵、祖廟、宗祠牌樓などのあることは田舎に行くといつでも見られる所である。之には古碑が重修建立せられてあつたり又大官のあとなどであれば、石人石馬が大なり

小なりその墓道に並列せられてある光景を見る。そこにまた石羊、華表、石門なども見出されるのである。その三は生活上の面子として上流たる丈の暮しをしてゐるか否かの問題である。外出に馬車、自動車、或は相當な美しい轎子などを有してゐるかどうか。衣裳も冬天のもの多ければ馬褂兒、大褂兒にラッコ鼯などの高價の毛皮を用ひ尙初冬、仲冬酷寒の別に従つて時候時候の別のあるのを用ひてゐるかどうか。すべてその面子の心より出てゐる問題である。その四は住宅の構へ、庭園、戲臺、大門などの問題であるがこは殊に八釜しい。上流の家の門や壁の高くして厳しく出來てゐるのは殊に結構である。たゞ土匪にやられない丈の用心が大切である。その五の教育文事の事は有筆秘書の其の左右にゐるものがあるとは云へ、自分に教養のないものは上流としての資格が認められない。洋學でも何でもよい。是非なくてはならぬ。たゞ洋學にかぶれ之に没頭せるものは考へものだと思ふが然かしスツカリ洋風で洋語ペラペラすべて歐米流の上流紳士になりすましてゐる家庭の主人公も支那には多いのである。

又上流は總體天下の士を友としてその嘉賓を迎へるチャンスが多く従つて花園庭園のある可きは勿論、骨董書畫のたしなみのあることその他遊戯何でも主客心を樂ましむる丈の方法のついでゐることが大切である。上流の家にしてこれがないければ品格風格と云ふものはつかない。こは家にとりては一種の裝飾のやうなものである。

支那の上流社會と云ふのはその元來の精神的とか教養的とかから云ふとやかましくなるが兎も角も形の見えてゐる上から云ふと大要上に云うたやうなものが悉く揃はなくては上流と云つた氣がしないのである。それ故祖先の墓地なんか、鐵道開通布設の爲めに買収でもせられようとするに面子論からして大いにさわぐ。氣もちの上では賣りたくても世間體を氣づかつて賣られないものが多い。相當な子孫のあるうちでは意地にも手離されない。上流の名家のあともあらうものがと云はれるのが顔にかかるところである。しかしそこにまだまだ支那社會のよい所があるのである。

支那の上流社會は無形の歴史や精神的の教養がいくらあつて見ても先づ有形的の條件が何として必要である。随分上流育ちの人で立派な考をもち、立派な教養のあるものであつてもその自分自身の身を奉ずることにかけては頗る厚い。贅澤三昧の事を平氣でしてゐる。つまらぬものに千金萬金を投じて之を求めたり身につけたりする。しかしその周圍のものや身分の少しでも下のものには殆んど目に見え透いたことでも餘徳を及ぼしてやらうとしない。如何にも餘所目のひどいものが時々ある。さうたぐさんではないが地方にはかやうな噂の立てられてゐるものがたまにある。どこの國だつて同じやうなものではあるが斯様な事は貧富の隔てのひどい國である上に支那には氣兼ねなくして平氣に行はれてゐるのである。無論上流の中でもかゝる類のものは世間から人望のあらう譯はないがしかし一向沒交渉でゐても上流として上流の顔で結構やつて行かれるのである。

支那の上流は上流であればあるほど世間の危険分子土匪兵隊などに對して絶えず警戒をし警備もしてゐなくてはならぬ。いつ何時襲撃があるか。掠奪をやられるか。時と場合によつては人質にとられることさへ地方では少なくない。あの通り警察権はあれどもなきが如き處であり又しかしなけれども有る如き變挺なところでもある。つまりそのなけれども有る如きとは銘銘の上流のうちには土匪の親方なり何なり、地方でならみのウンと利く「かしら」のやうなのが雇うてあることは上述の如くである又門番にもならみ役を看門として常設しておく。いつでも逆襲のやれる丈の準備は大抵出來てゐるのである。

上流家庭はその界限での人望があらうがなからうがそれには關係なく、家屋敷の用心、戸締り計りはそれは中々嚴重を極めたものである。北京城内あたりであると官邊筋のうちなら大抵警備隊が置いてある。處ならぬ處に路を隔て、向ひのうちは兵隊の屯營所と定め銃劍きびしく護つてゐる所さへ見ることがある。四川省の重慶で劉存厚

辨をその家に訪ねたときなどもそのうちは幾千の兵に衛らせてゐたのであつた。

支那は門の戸締りは上流のうちでなくとも一般に住宅の門を平生開いてゐる如きところは殆んどない。店舗か市場かでない限り住宅地界限であれば皆必ず門扉を固く鎖ざすのである。門の内には横木が挿入してある。若し來客でもあればその門の外部には金具の舌がぶら下がつてゐるからそれをチャラン、チャランと叩いて音をさせる。さうするとそれを合圖にボーイが出て來る。無論これは上流とは限らぬ。中流のうちだつて門をあけ放しにして置いては用心がわるいから必ず固く締める。危険なところがあると云ふ心配からであることは云ふを待たぬ。

上流のうちでは多く又四周の壁を高くする。その高壁のうちを見れば一見して富限者の家たることがすぐわかる。正面ばかりでなく側面の塀も高くする。隨分雲に高く聳えかせて城廓の壁の如く見えるやうに出來てゐる。支那人の破壊力の物凄い腕から云ふといくら一方で高く作つても何の事はないのであるがそれでも先づ先づ安心の出

來る爲めにとて成るべく高く乗り越されぬやうに作つてゐるのである。尙その例は普通の商家にしても質家商賣の所謂「當」だの「押」だの云ふところの壁を見ると之にも随分その高い大きな白壁に二間三間の大文字を見ることは官鹽普園の文字と共に市中の一大偉觀をなしてゐるのである。質屋は財貨を有する點で上流と同じやうなものであるから質屋の心理もその點で恐怖心から神経質になつてゐるのである。

支那は國家組織は悪くないであらうが社會的に常に誰れ人も不安を感じさせられてゐる。わけて支那上流の家は特にかくの如くその警戒の用意が必要になつて居るとは氣の毒千萬のことである。台灣台北の板橋もその枋橋の林本源の邸宅の内部外廓を見られたものはすぐこの間の消息を見ぬことが出来るであらう。支那の上流がその廣大な構へをなしてゐる事實の裏面には社會問題として色々そこに複雑した話がある。或は阿片で大きくなつたものもあり軍閥で近來は大きくなつたものがある。最近には又金フラン問題で急にふとつたものなどもある。そこで不安だとかこわいとか云ふの

ではあるまいが、何にせよいつ何時やつて來るものがあるか判らぬから高壁は必要缺くべからざるものとなつてゐるのである。

次には人との面會である。ウツカリ紹介もない人に面會したら大變なことになる。時局のときなどは殊に然かりである云ふので門番が人を容易に奥に通さない。尤もなわけである。門番には門錢をやらなくては奥へ入れさせないのもある。それも多いのであるがそれにしてもあの北京孔子廟國子監黃寺邊りのやうにあれほど必ず八釜しく云ふ處は先づ少ない。寺廟や名所舊跡を歴訪するとは別段罪のないことでそこらでは危険は伴はないが權勢の要路の大官とか地方の豪族とかの上流の人士は平生でもいつも注意が特別に要るのである。無論朝に夕にそのやうなことを心配してゐては自分で自分の家の門から一步も出られず轎や自働車で出門するにも護衛付きでなくては心配でたまらぬことになる。支那の社會は一面にはそのやうな心配に價する丈の危険が突發することもある。それと同時に又他の一面には極めて吞氣極まるところでもあ

る。世間に對して何等の氣兼ねもいらす勝手放題の贅澤をやつてゐても誰も何とも云はぬ。古代は建築の壁の色や柱の色の制度が八釜しかつた、今も北京紫禁城や萬壽山天壇あたりにはその名残りを見る。しかし一般にはなんの事もない。殆ど全く自由勝手と云つてもよろしいただ金がかかるから變つたことはやらぬ。普通のうちはいつもいつもさほどに嚴重に又八釜しくしてゐる譯ではない。けれども上流の門扉は自衛上特にやかましく且つその壁障のいやが上にも高くしてあること丈は否定の出來ぬ面白い社會的現象である。最近の珍談に天津の某上流家庭では訪問者があれば、必ず先づその門扉に來訪者の見えてゐる前で内部から取り次ぎの兵が出でて、行きなり銃なりピストルなりを向けて突き付けんとする態度をとるその人の誰であるかをよく確かめその人の僞人であるか否かを確かめ得て然る後にその人が名刺通りの人であつたら徐ろにピストルをしまつてこれへと計り門内へとほしてくれろと云ふ所さへもあつた。支那上流の生活をするもの亦難いかなである。

しかし支那人の上流の人士には存外心に又ゆかしいゆとりもある。決して恐怖心のみで縮み上つてゐるやうなものではなく悠悠迫らずである。近處の貧民長屋の軒端に吊してある鳥籠の鳥でも瓢然見に出てポカンと愚者のやうな態度で以つて心に大自然を賞美してゐるやうなところもある。必ずしも日本の紳士のやうに朝は各種の新聞に目を通さなくては氣がすまぬとか。たくさんの手紙を見るとか押しかけて來てゐる大勢の訪問客に一々面接をするとか云つた切り詰めたせわしないプログラムは決してないのである。これは上流に限らず總べての社會の大勢も手傳つてゐるがもともと人間が呑氣に出來てゐる支那の國民性から支配されてゐるものと考へられるのである。そして上流の人には殊に又文學的と云はんか文人的と云はんか何となく趣を解してゐる味のあるものが多い。そは修養を積んだ爲めに出來た趣と云ふよりも自然の生れたままの趣と云ふものが現はれてゐる。日本人にはそれが甚だ少ないやうである。日本はビジネス的のものは多く出るが趣に富んだものは見出しにくい。支那上流の社會でも

勿論忙しい事に慣れてゐるものはビジネスマンになつてゐるもありはする。けれども本来多くは趣の方に傾いてゐる。そこに人間味の深い味がこもつてゐるのである。

六十 上流家庭の庭園住宅

支那の上流の紳士淑女はその多くが必ずしも贅澤三昧に耽つてゐるわけではない。第一その身成り衣裳にして見たところで以前清朝時代北京交民巷の今の日本公使館の位置にゐられた肅親王の如きツイ先年亡くなられたけれども自分が旅順の新市街肅親王の邸宅で先年親王に御目にかゝつたときの如き、尤もいきなり訪ねて行つて面會したのであつたが、不斷着のままであつた。それも木綿の紺色の大掛兒をつけて書物拓本などの蟲干しをしてゐられたのであつた。談話の序でに記念の書などもかいてもらつたのであつたがともかく極めて身なりなどは簡単な粗末なものであつた。北京にありし昔の事を思ひ出せばうたた今昔の感にたへぬものがあつたであらう。しかし自分

はその餘り古いところの状態は知らない。存外質素であられた事かと思ふ。又今日北京三條胡同の日本民團や大和俱樂部になつてゐる所の豫親王府の墟などを見てもこれもさうたいしたもの云ふ程ではない、先づ萬壽山は西太后の居られた簾のさがつてゐる居室あたりからづつと池畔勾欄の大理石彫刻がその美しい倒影を水底に映してゐるあたりあの邊の景趣と來ると頗る興味が深い。いつまでも見て居りたい氣持ちのする所である。この邊の庭園、建築ならば上流のものとして相當見られる丈のものであると評されるのである。

庭園には本来相當の樹林老木のあることが必要であることは云ふを待たぬ。槐樹は昔大臣の家のシンボルとして必要であつたが宛も北京のかなりな大官の屋敷あとにはこれが門内に屹度茂つて緑蔭の影暗きまでに古色を現はしてゐる。故國には老木大樹の必要なと同じく故宅にも老木大樹が要る。池畔樓閣は美しくともそのバックに樹木老木の茂みがなくては舊家にならぬ。殊に上流の家としてさうである。こは獨り支

那ばかりではあるまいと思ふ。それから支那の庭園住宅建築には古から大理石なり太湖石なり石材を澤山用ひる。石だから永久に腐らぬ。日本では濕氣の多いくせに木ばかりを多く使ふからすぐくさる。支那は石の方を多く使ふのであるから年代がたてばたつほど古色がついてよくなる。永もちがして品格がつくのである。然し多くは一代限りである。子孫が榮えなくなれば修繕もせられなくなつてやりばなしになつて衰れた状態になつて了ふ。上流家庭の庭園建築には池亭が多い。池亭はその必要條件と見え殆んど必ずよい庭には之が見える。樓閣や芝居の戲臺はあつたりなかつたりであるがその代り池亭は池の中へ出ばり、中洲の岩ぐるみの上などに蓮花を隔て、眺められるやうに必ず拵らへられてゐる。それから庭の門である。門は家の入口の大門以外に庭園池畔に小門、中門があり又門の一方には太湖石を積みあげて堆く積み上げ天然の石門のやうなものを潜らせるやうに出来たのがある。北海にも白塔から海に出る間どころに何だか岩の胎内ぐり式のものが出来てゐる。これらは庭の變化を示す爲め

のものであるか確かに一つの方法である。

庭園の庭路にモザイクの舗道を作ること。これは又藝術的に面白いことで上流の庭園を拜見するときにはいつも念入りに見るものである。多くその圖案は盆栽式の蘭の形、菊の形を始めとして圓形模様直線模様など色々ある。或は全體が鐵畫の式に作られてゐるものもある。千差萬別であるが小石の粒の揃つたものをよくも収集め色彩を美しくし巧に造られたものである。その漆喰ひによくも根氣よくあれ程圖案的に嵌め込んだものかなど感心させられるのである。これはたしかに上流庭園の小徑に品格を添へるものとして必要なものである。日本では相州腰越の近藤氏の故莊園内の路が全部翁の生前モザイクで丹誠されてあつたを見たことがあるがこれも大半震災で毀されたことゝ思ふ。尙上流庭園の塀の築き方であるが、これは頗るその變化が多くその塀の上半が大抵すかしにされてゐる。その方法が又圖案式に面白く出来てゐる。もと半圓形の瓦を取り合はせてゐるのであるがその瓦の曲線の組合せかた如何によりて

いかなる圖案でも出来る。そばに近寄つて見ると粗末なものであつても少しく離れて見るときはその雅致何とも云ひがたきものがある。必ずしも上流の庭でなくともこは見られるが上流の屋敷の周圍などには殊にそれがふさはしい。そしてそのそばに竹林があつたり椿樹の植込みがあつたり蔦がからみあつてゐたりする景色はわるくない。塀には更に又圓形のくりぬいた出入口の開いてゐるのがある。長廊下から横に出て庭に下るとか又中庭と後庭との間の通路とかにその塀に人間の出入の出来る大きな孔があけてある。塀の厚みと同じ厚みの穴であつて多くはその縁が黒色で色彩られてゐる。その孔を通りぬけるとその奥には芭蕉の植込みがあつたり或は池畔の石橋に出られるとか云ふ仕組になつてゐるのである。

かう云つた上流庭園のデテールに這入つて逐一その説明紹介をしてゐると最限なく述べ立つ可きことがある。しかし要するに上流家庭の庭園と云へば中央に池があり、それを中心に樹林古木があり、樓閣が排せられ門があらはれモザイクがあり塀の

圖案設計的すかしがあるとか云つたやうなことは普通に見るおきまりの設計である。

十四 支那民衆生活の講演

六十一 支那人の氣持ちに合はぬ日本の帝國主義

私は幼少の時分から支那の事が好きであつたので、今でも支那の事を研究するのは、日本の事を研究するやうな氣持がして居る。従つて私が今此處でお話し申上げるのは、何だか支那にゐる支那の事をお話し申上げてゐるやうな氣分がして居るのであります。そこで今日は日本人側——殊に資本家として立つてゐる日本人、或は、動もすれば、軍國を背景にして居る如く、誤解されてゐる、日本人とか、其の他一般の日本人に對して支那中華民國の人々がいかなる印象を持つてゐるか、又その氣持はどんな風に變りつゝあるかと云ふやうなことにつき、忌憚なく申述べて見たいと思ふのであります。

支那の話は大體論は今日では大抵判つてゐるのであるから、むしろ成るべく微に入り細に入つてお話をする方がよろしい。殊に各方面のエキスパートの集まつてゐらつしやる所々では、どの方面にどう云ふ風に係りあひがあつても構はない。一層のこと無遠慮に話をして真相を傳へることを目的とした方がよからうかと思ふ。尤も果してここに申上げることが各方面のエキスパートに對して、御満足を與へ得るかどうかは、覺束ないことと思ひます。けれど氣兼ねなく無遠慮に申上げ、後で又誤りを正して頂き、旁々お教を賜はりたいと思ふのであります。

今から支那の人々の氣持に付て申上げるのであるが、その前に一應お尋ねをしておきたい。又申上げて置かなければならぬといふことがある。

若し皆様のお心持にしてどうせ多寡の知れた支那人だと云ふやうな見縊つたお考があるのであると、それは第一爰に申上げるお話の妨げになる、又第二に日本人としての帝國主義——と云ふと語弊が伴つてゐますが、兎に角日本と云ふ帝國を背景として、

我れは支那に臨んで居る、支那を研究して居るのである、と云ふやうなお考が濃厚になつてゐると、これは亦非常な妨げをなすものであります。支那人位人文の學問、所謂科學なるものを修めずして、而かも實際に於ては之をよく卒業して居る國民といったものはない。即ち人間學としては修めないかも知れぬが實際に於て其味ひを立派に味ひ得て、卒業してしまつて居る、從て歐羅巴の文明が榮へて居らうが、日本の文明が進んで居らうが、そんなことに付ては何等恐れを懷かない。何等恥しみを感ぜない、露骨に云へば、眼中歐羅巴無し、眼中日本無し、と云へる位の所まで進んで來て居りはせぬかと思ふ。

されば一口に申せば、支那人の頭は十分に悟り切つて居る。人生の問題に付ても、文明の問題に付ても物質的方面の問題に付ても總て十分悟りの道に入つて居るやうに私には見える。同時に支那人から見ると、日本人位悟りの悪い又日本人位資本に執着し、日本人位國家をバツクにたよらうとする國民は少いだらうと云ふ風に見受けられ

る。從て日本人としては無意識に語つてゐることであつても支那の人からは、それが如何にも一種帝國主義的色彩のあるやうに見られ、又資本的色彩のあるやうにも見られるのである。殊に戰捷民族と云ひ得られるかも知れぬが日本人が日清戰爭に勝つた民族であると云ふことが日本の子供に至るまでどこ迄も深く頭にコピリ付て居ると云ふことが、どれ位支那人の氣持の上に影響してゐるか、測ることの出来ない程まづい關係になつて居ると思ふのであります。

六十二 日支人性情の相違點

日支間には、國交の上にも色々問題は澤山溜つてゐるのであります。本當の所を言ふと、日本人は、支那の人の氣持にシツクリと合つて居らない所がある。是は淺ましいお話を申上げるやうであります。亞米利加では約八十年の計畫を立て、毎年六千人位からの宣教師を送り、學校であるとか病院であるとか、孤兒院であるとか、

種々な慈善的文化事業を始め来て来たのである。さうすれば支那人が米國最良になつて呉れるものと思つて居つた。所が最近の様子では少しもさう云ふ形跡の見えないのみならず、全く唯その真似をして居るやうにしか支那人に見えて居ない。日本の對支文化事業の如きは有りがたいとも何とも思つて居ない。少くとも青年達はさうである。東京などでも外務省あたりの手を経て、大分學資を得て居る支那の青年がおりますが、それ等の人は、このやうなことを云つてゐる。我等の父兄が納税した金がグル／＼廻つて我々の手に入っただけのことである。我々が當然貰ふべきものを貰つて居る丈のことである。寧ろもう少し餘計寄越しても可きさうなものである云々。斯う云ふ風に考へてゐるものばかりでもないが、しかし之によつて見ると、彼等が多少とも精神的に我々に近づいて呉れるだらうと思つて居るのは、唯日本人の考へてゐる理窟であつて、決して日本人の考へるほどに、効き目が現はれては居らぬと云ふ事實が判るのであります。

或は又同仁會あたりで、病院の事業を經營し、病人には診察をしてやり、藥を與へてやり、その結果彼等が幾分でも我々に近づいて来て呉れるだらうぐらゐに思つて居ると、必ずしもさうはまゐらぬ藥を貰ふ間だけの話、脈を握つて貰ふ時は脈を握つて貰ふ間だけの話である。イザ排日、イザ掠奪と云ふ時には、それ等の慈善事業なり、排日、掠奪事件なりが何等關係を有たうとしないのである。それを何等か關係を有つものゝ如く豫想して居ると云ふことは、本當に、支那人の心底が理解されて居らない證據であるのである。そこで多少とも其處に期待をすると云ふやうな氣分でもあつたならば、さう云ふ結果になると、非常に落膽をし、愛想をつかすと云ふことになるのであるが、つまり、こは支那に對して良いことをしておいたから必ず支那に於ける日本の事業が良い結果を齎らすかと云ふと、それは甚だ申上げにくいことでもありますけれども、さうはならない、是は單り支那に於てばかりでなく、日本内地に於てもさう云ふ妙な結果を生ずることが屢々あるのであります。

そこで話が元に戻りますが、日本人は支那に臨む場合に、殆んどその總ての人々が、俺は日本人だぞと云ふ頭が強くはたらし、自分の方が支那の國より一段高い所に在るのだぞ、と云ふ氣分が必ずあるやうである。是は日本の資本家には勿論、所謂有識階級の人達の間にもある。或は又宗教家とか種々慈善めいた方面に關係せる人々の間に於てさへもある。

かやうな氣分を擁してゐて、支那に臨むと云ふことは、甚だ支那人を理解しないやり方ではないかと思ふ。况やそれ等の人々がやゝもすれば口に我々は支那の民衆を尊敬するとか、同文同種を重んずるとか、色々體裁の好いことを申してゐますけれども其の腹のドン底には、國家中心主義又は政府を非常に偉いものとする心をどこ迄も有してゐる。支那人から云へば、一種國家主義の、偏した氣持が考のうちに一ぱいになつて居る。これは支那人の頭には殆んど理解されにくいことである。支那人は事更らあの通り政府を頼つて居ない。又國家を重視しない。その支那人位世界で獨力獨行、

何處までも自分の力で押進んで行かうと努力をし、又そのあたまを無意識の間にはたらかせて居る者は無いのである。之に反して、日本人と來たら、極端に國家を頼り、政府を頼み、一にも二にも國家の補助金を當てにし、國家でなくては夜も日も明けない。是は固より望ましい考へであるかも知れぬ、けれども支那に對する場合にまでいつ迄も從來の如くその氣持でゐては、却つて常に累をなすのであります。兎に角この兩國の間の氣分の相違は、支那の海外發展者と日本の海外發展者とを比べて見ても能く分るのである。

日本人が海外に發展せんとする時は、先づ移民協會とか、移植民の會社とかが出来。或は又其間に色々活躍する人が現はれるのであつて其背後にはチャンと必ず政府が控へて居る。政府の調べによると一昨年は人口が八十萬殖えた。昨年は百萬殖えた。従つて大いに海外に出て行かなければならぬと云つて、獎勵をしてゐる。或は大學の講座に於て、或は一般社會の講演に於て、或は又新聞雜誌等に於ても、頻りに日

本人の海外發展を宣傳してゐる。それにも拘はらず海外に出かけて行く者はといふと甚だ少い。泰山鳴動して鼠一匹といふよりも、猶ほ僅かである。數家族、數十人、數百人といふものがブラジル邊りへ行くといふが精一ぱいの處である。それも向ふの土になつてしまつても可いと思はせる丈の設備なり、將來の保障なりが出来てゐるわけではない。又その決心をして居る者は極めて少い。

ところで南洋方面に擴つて居る支那人の連中を見るとどうであるか、その決心、其の成功振りはこゝで事新しくお話する必要も無い位に立派に解決されて居る。而かも彼等は一人として領事館に頼ると云ふことはしない、又一人として自分の國が軍隊の力に依り我々の生命財産を保護して貰ひたいと云ふ氣分の者も無い。又さういふ處へ出かけて行つてもゐない。假にあつても、支那政府としてさう云ふことは出来ない。その兩國の先づ海外に伸びやうとするもの同志の氣持ちを比べて見ても、日本人と支那人との間にはそれだけの開きがある。況やその國內に於ても日本人は常に國家に頼

み、國家を背景とし、國家の力と云ふものが、陰に陽にうしろ楯となつて居る。何事があつても、日本では警視廳に届け、警察に訴へて出てお巡さんに來て貰ふ。それに依て何よりも安心を得ると云ふやうに、國家を以て非常に有力なものとして、頼りにし又それだけに強いものと考へても居る。支那ではさう云ふことは願つても駄目なものであることを承知し、初めから國家を當てにするの考などはない。衣食住を始め、自分のことは何處までも自分で處置をするのである。其代り自分の財産が一朝にして全部無くなつてしまつても、極めて諦めが可い。日本人のやうに、急に財産が無くなつたからと云つて愚痴をこぼしたり、又首を縊めたり、水に飛込んだりすることはしない。尤も支那人の心中の方法として水の中に入ることも芝居にはあります。けれども、その一人は、片方の見て居らないことをたしかめ、ノコノコ這ひ上つて出て行つてしまふ。本當に死ぬるやうなことはしないのであります。

六十三 支那民族のあきらめのよい美質

支那人はかくして生活の中にその國家に頼らうとか、政府に頼らうとか云ふ考へが起つて來ない。それが四億八千萬からも居るのである。然るに我々大和民族は、自力といふことを考へず何時でも政府に頼り、國家の力に依てのみ我々の存在を全うしようとする。そこに頭がコビリ付いて居る。それ故に紡績業者が幾億の資本を上海方面に投じて居ると云ふと、之に向つて政府の然るべき責任ある力——その非常に力のあつた後援を豫想して來るのである。これは必ずしも紡績業者でなくとも、日本人はいつかなる場合にも、大體に於いてかやうな考である事を豫想せざるを得ぬのである。けれども支那の人士の考になつて見ると、さうではない、例へば南洋方面に行つて投資をして居る支那の華僑連中は、不幸にして一朝非常な水害にでも遭ひ、其事業が根柢から覆され、不結果に終つたと云ふことになつても大變諦めがよいのである。支

那に於てはその財産が掠奪され、機械が破壊され、全く臺なしにされることがあつても、すべて諦めるべき運命にでもあるものゝ如くに思うて居るやうに見へる。こゝが日本人と餘程違つて居るところである。

要するに資本家と云ふものは、弱い者である。資本を下ろして居る爲めに、寢ても醒めても心配で堪らない。殊に大阪方面にありては、その種の人が多い。こは結構なことであるがさう云ふことが云へるのである。所が支那では千萬圓あらうが、百萬圓あらうが、一夜の中に投機でなくしてしまつて、全く一夜乞食になつてしまふものかなりある。漢口から上流宜昌地方に行く間に見る所の沙市方面の氾濫を見てゐると一夜の中にどうかすると土地が、スツカリ水に浸つてしまつて、數年間も大水が退かない。その爲め大地主が一夜の中に乞食となり、漢口の郊外に來て毎日町の人々に憐みを乞はなければならぬやうに落ちぶれるものも澤山あるのである。

さう云ふ有爲轉變の際に於ける支那人を見て居りますと、支那人位諦めのよい民族

は少い。例へば自分の親が官憲に拉致されて、銃殺されるとか、或は馬賊から毎日指一本づゝ切られて、板に載せて持つて來るとか、又人質として或は巨萬の金を強要しようといふ場合など、その如何なることがあつても、すべて全く諦めが可いのである。決してそのとき泣いたり女々しいことを云つたりせぬ。自分の親が何とされても仕方がないと諦めてしまふ。すべてこれである。

日本人は支那に巨萬の資本を投じて居るところから、それに依り必ず利益を産み出さなければならぬと云ふやうに考へるであらう。その點は支那人も無論出来るだけの利益を生み出すやうに努力することはします、けれども、その急轉直下のそれが臺なしになることがあつても、その諦めの可い事だけは實に驚くべきものであるのがあります。

六十四 支那安定策などは望みがたい

支那人の日常生活には色々申し上げたいことがあります、その政府が今申しましたやうに、國內に於てさへも當てにならず、その又國家の力に頼ることも出来ないこと云ふことはむしろ、衷心同情すべきことであつて、これは深刻に支那民衆を支配して居る事柄であります。従つてその國民として國家に對して何等有難味を感じてゐるやうなことはない。その物價が安くて而かも愉快に生活が出来その歡樂生活にたやすく耽り得る所の支那民衆どもに取つては政府なんかどうでもよい。其の生命財産を安固に保つて呉れる力があるならば、政府の値打も認められるのであるが、さう云ふことが期待されなければ政府は有つてもなくても同じことである。従つてこゝに有力な政府を是非とも造らなければならぬと思ふて居る人は、職業的に活躍する人間は格別、一般民衆の間には斷じて無い。或は青年達の間にしても、其面子を重んずる爲め又自覺心の起つて來た爲めにさう云ふことを言ふ人はあるであらう。けれども腹のドン底に於ては、支那の大官達にしても其處まで考へて居るかどうか、その邊のことになると怪

しいものである。況んや君臣の義なんか云ふものは、支那ではペーパーのやうに薄くなつて居る。

支那は王朝が衰へやうが亡び倒れやうが、王朝の終りにはその盤根錯節の間に、敢然乗込んで、何處までも其の難局を切抜け、そして正成の如き功績を挙げ得るやうな人は一人も出てない。ダイナステイが潰れやうが、潰れまいが、そんなことは自分に關係はない王者そのものがどうであらうが、爲政者がどうであらうが、何等自分に關係のあるわけは無い。所謂「帝力我に於て何か有らん哉」と云ふ思想は古に於てのみならず、未來永劫、支那に於ては變らないことであらうと思ふ。従つて帝國主義或は政府や國家の力をバックにして支那に臨むと云ふ者とは、全然相容れないのであると思ふ。又支那は古今を通じて法律が制定せられ、法律の行はれてゐるやうに考へらるるが、實際は疑はしいのであります。法律の上では如何に定められてあらうとも、直ぐ權力者は人を銃殺してしまふやうなことをする。最近のこと蔣介石派の李濟琛が、

廣東で二百數十人の共產黨員を殺して珠江といへる河に之を投じたのであるがかやうなことは昔し秦の始皇帝が儒者を坑にしたる事實を始めとして、幾らでも支那にはあることで敢へて珍らしいことでも何でもない。寧ろ支那としては尋常の事と見らるゝのである。

しかし支那人の思想からすると大體に於て國の政府などは無くてもよい、また國家の形式などがどうなつてもよろしい、と云ふのが、支那人の心の立前である。四億萬の民衆の氣持ちは即ち悉く是だと云つてもよろしいのである。

従つて今日列國が支那に對して心配してゐるやうに、國家の中央政府に今少しく權威を持たしめ、もつと有力なものにして政府自らに南北を統一せしめ、そして國家の安定を得させるやうにするといふこと、これは列國の方では均しく希望する所であつて、又同時に支那の方でも之を望むわけであらうと考へられる。けれども支那人自身の腹の底は果して、其處まで考へて居るか、どうか、分らない。もつと穿つていふな

らば、南にも相當有力な政府があり、北にも名義上の政府があり、中心が二つも三つもあつてもよい。この方が對外關係からは支那には可いかも知れない。といふのは南方に出来た事件は北方は知らないと言ひ得るし、北方に出来たことは南方は知らないと言ひ得るわけである。列國は南北の双方の間に奔命に疲れるわけで、何時までも解決の出来る時が来ない。支那としては解決しないで抛つて置く方が利益である。解決をすれば必ず損をする。さう云ふとも大きい所から見ると考へられるのであります。支那の安定と云ふことも、唯單にペーパーの上だけなら幾らでも言へることであるけれども、實際に於てさう云ふことに力を入れても中々むつかしい。今すぐどうといふことは餘程考へ物であると思ふのである。

六十五 安全なる山寨生活

又租界の問題であるが、こは青年達は理論の上又は自覺心の上から今日の時代の空

氣に乗じて租界回収を叫んでゐる。固より之に就ては運動費も随分要るのであるが、それは實業家方面から宣傳費の一部として援助するものを見出すことが出来るのである。けれども、しかし功成り名遂げて、自分の生命財産の安固を圖りたいといふ程度に達してゐる者は、一朝事がある場合のことを考へて見ると何としても、何處か逃げ場所が必要である。絶對安全地帯ともいふべき場所を考へてゐる。そこでかくの如き考のある人は、租界回収の叫を自分は叫んでゐない。一種の矛盾の現象ではありますけれども、有産階級の人士は絶對安全なる避難地帯を求めようとしてゐるのである。しかし北京で或る學生に會ひましたら、こは租界回収のことを泣いて懇へて居りました。

かくの如く青年達の立前と、有産階級の人士の立前とは、全然違つてゐて、そこに矛盾のある所があり、支那らしい面白い所もありますが、青年達のいふ所は尤である。併し支那のやうな國家の秩序の有るが如くしてない所では、租界と云ふ名前が差支へ

ればやめてもよろしい。又外人がそれを管轄して居ると云ふ事が悪ければ、それを廢めても可しい。が、兎に角何處にか支那一般良民の爲めに絶対安全地帯と云ふものが必要である。支那が今日のやうな無警察の状態であるのであれば、恐らく永久に必要であらうと思ふ。かやうなことを外人の口からいふときは支那の人々は非常に立腹をするであらうけれども、支那の人から之を言へば、何も腹を立てる理由はない。實際安全なところがなくて困つてゐるのである。

其證據には例へば四川省の奥地で三峡を越えて、萬縣、忠州の邊り、又重慶方面から合江、納溪、江安、叙州の邊りで上海からいふと揚子江を遡ること約千五六百哩といふやうな上流の地方に行つて見ると、到る處の山嶺には絶対安全地帯が出来て居る。こは爆彈投下の行はれない限りそこならば絶対安全であります。不思議に高く屹立した山の上などに金殿玉樓式の住まひを造つてゐる。そこへ上つて行くには石段が唯一の路としてある計りであつて、其下には土匪の親方を買收して、それに門番をさせ

て居る。揚子江の江邊に浮べてゐるハウス・ボートの船頭も矢張り睨みの利く土匪を使つてゐる。其の睨みの利く土匪の權力といふものは、上海でいつて見れば、ミュニシバル・カウンスルの印度巡查以上の力を有して居る。四川省の奥地にはその時、その時の地方官憲もあるが大體に於て本當の安全地帯がない、その爲め富豪連中は山の上で自分で絶対の安全地帯を造り、其處に自分の生命と財産を托して居る。

この四川省は支那四百餘州の縮圖のやうな所であるから、四川の一省を研究すれば、支那の事は何も彼も分ると云つてもよい位のところでありませう。が、豪族の家へ参りますれば、必ず武器や兵隊など備へて、その自衛の途が講ぜられてゐるのであります。

臺北のそばの枋橋（今は板橋、いたばし）と云ふところに行つて見ると林本源の第一號の住居があるが、領臺以前そこには三千人からの兵隊を容れ得る兵營があつた。劉明傳の時代を始め、臺灣もかなり自治的にはよく治まつてゐたのであるが、しかし臺北に於ける土匪とか暴徒、モツブの起つて來た場合によると自衛の爲にぜひともその

備へが必要であつたのである。それ丈けの設備をして置かなかつたならば林本源の一族の生命、財産は保障されなかつたのであります。又當時臺中の田舎に潭子墘（今のとよはらの在）と云ふ所があつたが、あの邊の故老だちに聞いて見ると日清戦争以前には夕方子供を戸外に出して遊ばせて置くに擧はれてしまふことが頻々あつた。此頃は有難いことにその心配がなくなり、夕方子供の戸外で遊んで居るものがあつても、子供の擧はれる數がへつたと云ふことを申して居りました。實に物騒な世の中であつて、恐らくこれが一般の風習であつたらうと思はれるのである。

かやうな社會状態を見てゐたのでありますから、支那の社會では自分で自分が自衛の途を造つてゐるより外に仕方が無い、若し事のあつた場合には、人間の五十や百人を殺す位のことには問題でない。従つて支那人が山寨の上にて、四方から攻撃を受けるやうなこともあつたとするならば、其處から當然鐵砲で撃ち攘つてしまふと云ふことは、支那人としては正統に當然、爲さなければならぬことであると信するのであ

ります。それを山寨の上でやらなかつたとするならば、いつも馬鹿にされて其住まひの門は破られ、山寨の屋敷は潰され、家財は壊され又掠奪されてしまふ。これは亦當然のことであります。

この山寨の生活なるものは、支那の豪族が絶對安全の生活方法となして居るわけであるが、それと同じやうに、支那に於ける紡績會社の如きものも矢張りその方法を執つて置かなければならぬ譯であらうと思ふ。その工場が支那人の經營であらうと、英吉利人の經營であらうと、又日本人の經營であらうとを論ぜず、各國その國としての力を背景にしないやうにして自分で自衛の方法を講ずるより外によい方法は無いのである。一朝事が起つて困らされてから、支那の政府を相手に掛合つて見たりした所で何の役にも立たなければ、ちつとも香ばしい解決をして呉れるわけがない、先づ其の點はかやうな風に考へらるゝのであります。

併し何等其の防備がなく、其處に投げやつておいて殆んど滅茶々に餘す處無く破壊され、財産も何も残らずやられてしまった場合支那人は立腹して憤慨するかと云ふと、そこが支那人である。その一度ぐらゐは憤慨もしませうけれども、大抵のものは諦めがよいのである。別に苦情を申立てゝ行く目當てもないわけであるから泣寝入りとなるのである。こゝが支那に於ける一般普通の世渡りの秘決になつて居る。所謂沒法子と云ふ言葉がありますが、萬事それで行く實に薩張りしたもので、何等未練が無い。

千年、二千年の昔のことを考へて見ても、如何に一時は榮えた王朝でも、所謂槿花一朝の夢であつて、必ずや、間も無く亡び行くものである。其の繁華を誇つてゐた花の都も、やがては見る影もなく荒れ果てゝしまふものである。榮えるのはやがて衰へ

るの前提であつて、五十年か、百年か、そこに多少の年限の長い短いの違ひはあつても、千年後の今日から考へて見れば大したものではない。今日までの支那文明の遺跡なるものも實は悉くそれだと云つて可い。南京城内の今日を見てもかの「南朝四百八十寺、多少の樓臺煙雨の中」と歌はれてゐる唐詩選にある杜甫の詩の通りの状態である。總べてのものが斯う云ふ風でありますと、其の諦めのよいといふ氣分を有つて居ると云ふことが、一種の清涼劑でリフレッシュメントになるわけである。従つて之が帝國主義或は資本主義の人々の氣持ちに見出さるゝやうな執着の強さは不思議のやうであるが、支那人間には見出されぬ。そこは支那はアツサリしたものである。

法治國の人々はやゝもすると最も完全な警察權の行はれることを支那に向つて希望せんとするやうであるが、それは支那に於ては希望する譯にはいかないのであります。無論勞力が安く得られ、物資も安く、土地も安い、と云ふ所に事業計畫を立てらるゝわけでありませうから、そこに相當以上の収益が得らるゝならば、話がうま過ぎる。日

本人はそこに、全部臺なしになることを考へて居ない。こゝは支那の人とちがふ點である。

支那の人は非常な利益を得ると云ふことを考へる代りに、又全部損をしても仕方がない。諦める外ないと云ふことを半面に必ず考へてゐる。これが大きいエレメントとなつて居るやうに私には見える。即ち利益の一方ばかりを考へて居るのでなく、其半面に全部臺なしにされても少しも恨まないと云ふ所が支那人には屹度ある。そこへ行くと、亞米利加人でも英吉利人でも、列國の支那に貸し付けてある鐵道借款の如き、何處までも元金を支拂はせう、利子も取らうとする。日本でも日本の借款で出來てゐる南潯鐵路の如き、矢張りそれである。所が支那側では政府の財政は固より地方でもその窮乏の結果元金も利子も共に拂へない。始終矢の如き催促をしてはゐるけれども何のことはない。餘りにやかましくいひ立てると、それぢや鐵道も、枕木も、砂利も、レールも機關車も、何も彼も皆持て歸つてくれと來る。元來初めから此方が頼んで架

けてくれといつたのではない。あなたの方から勝手に押賣して來たのではないかななどと云つて嘯く。支那の社會情態では、まだ〱支那人は畦道でも歩いて居ればそれで用は缺かないのである。北京、漢口間を急行で飛廻はらなければならぬと云ふやうな人は、支那には滅多に無い。それ等は大抵外人側、或は資本主側か、或は政府の特別な人達ぐらゐるものである。他の一般の支那人どもは寧ろ鐵道が出來た爲め、戦争が大仕掛に行はれるやうになつたところぼして居るのみならず、支那の地方人民に脅威を感ぜしめて居るのは、寧ろ文明人が入つて來た爲めだと言つて居る。それは何故かと云ふと、朝鮮人も臺灣人も言つて居ることであるが、往年某内閣の時、軍事的の頭でのみ道路が造られたがその爲め物の運搬が容易になり各地方に出來た物産は、どんどん他處へ持つて行かれてしまふ。そして田舎に残される物は、つまらない滓ばかりで、而かも其數は少なくなるから、從來安かつたものが急に高くなつてしまつた。百姓達は、日本文明が、半島の津々浦々に浸入つて來るものだから、物が高くなる一方でも

つとも有難いことは無いとこぼしてゐる。道理はそれと同じ事で、支那に於ても地方の田舎の民度の低い連中どもは皆さう云ふ考へを有つて居る。仍ち列國の人はやれ鐵道を架けてやつた、やれ病院を立てゝやつた、學校を立てゝやつた、何だ彼だと云つて、支那側に向つて恩を賣つて居る。けれども、實際地方文化の程度の高くなつたと云ふことに付ては、或一部の青年位は歡んで居るかも知れませぬが、一般の民衆、殊に一般の田舎の百姓どもは歡ぶ所ではない、内心困つて居ると云ふ情態であります。

その學校を立てゝくれたと云つてゐても、支那側に取つては何も有難いことはない。固よりその生徒を風呂に入れ、新しい着物でも着せてくれると云ふやうなときには喜びもませう。けれども、それとて別に感謝して居る譯ではない。同時に又西洋人は文明を進めてやつたなどと云つて、恩を賣つてゐても、支那の人は文明に進むことを必ずしも有難いとは思つては居ない。其處の考へかたが非常に違つてゐる。列國の方では必ずしも恩を賣つてゐるもの計りでもあるまい。けれども少くとも支那一般の民

衆の方は西洋の文化にさほど感謝して居ない。或は寧しろ餘計なものを持つて來る、ベストやコレラ菌まで持つて來て之を流行させ、やれ大掃除ぢや、やれ顯微鏡ぢや、そして、やれヴィタミンAぢや、Bぢやとやかましいことをのみいふやうになつた。營養を口にするものは、却つて青瓢箪のものに多いのである。支那は内地に深く這入り、奥地に行つて見ると、自然の儘の太古の生活を營んでゐてそれが有難いところになつて居る。山に入らば、所謂山中曆日なしと云つたやうな所もあるのであります。

戦争などのある地方は別であるが、奥地に這入つて見ると戦争の殆んど無い所が澤山あります。支那の内地は實に廣くて、十中九割以上のところは戦争の無い地方である。さう云ふ所に行つて、民意の那邊にあるかを探つて見ると、殆んど今日の文明とか潮流とか言ふやうなことは疾くに超越して居る。そしてその不文律ではあるが、自分等の社會を出來るだけ完全に發達させ保存の出來るやうにしやうと云ふことに努力をして居る。それも國家だの、政府だのと云つて見たところで當てにならぬから、自

分の村は自分だけで完全に立ち行くやうにと心がけ、又完全に安心の出来るやうにやつて居る。殆んどお役人の手は其中に入つて來ないやうに出來て居る。

されば大體自治本位であるから國家のすることは殆んど眼中に置かない。軍艦を増し北洋艦隊を充實させて、日本と戦争をしようがしまいが、そのやうなことは問題にしない。日本人は日清戦争で成歡、牙山の役を始め、連戦連捷で、非常な勝ちいくさのプライドが、子供の心にまで強く印象づけられて居ります。けれども、支那人にはさう云ふことは忘れられて居ると云ふよりか、初めからんで頭に無い。一般人民は日本と支那が戦争をしたなどいふことは知らない。知り互るには、餘りに國土が大きい。能く読み書きの出来る階級連中でも當時の北京政府が何處かの國とゴタ／＼戦争をやつた位にしか考へて居ない。

私は今共産黨の勢力の濃厚に認めらるゝ湖南省の長沙からかけてあの方面の田舎の學校に行つて、教科書を見た。恰度日清戦争の所が書かれてあつたが、それは支那が

連戦連捷の勢で、日本は散々に敗けたやうに書かれてあるのを見た。そこで自分は是は間違つて居りはせぬかと聞いて見ると、さう云ふことはないと云ふ。然らばと段々突き詰めて行つた所が、それはあの時分北京政府が勝手に日本と戦端を開いたのであつたが、どちらが勝たうが負けようが、そんなことは初めから問題にして居らぬ、と云ふことであつた。かやうな風に其の態度は實に大きい。日本人はそこへ行くといふ云つても小さい。そして僅かなことを氣に掛ける。戦争に勝つたと云ふことをひどく自慢にもし、之を色々プライドの種にもする。支那人では正直なところそんなことは初めから問題にして居ないのである。歐羅巴戦争の如きも、その當時百姓どもは之を全く眼中においてゐなかつた。又その戦争のあることを知つて居る人も殆んど無かつた。又それで支那といふ國はやつて行ける國である。鐵もあの通り澤山あるし、石炭もいくらでも採掘される。山西省の大同方面に入ると殊に良質の石炭が多い。又四川に入れば、岩鹽が澤山取れる。これはむかし地質年代カンブリアン時代に、印度洋の

海水が四川省の方まで深く入つて居たことであつた爲めであらう。

かやうな事實から考へて見ても支那の物資の豊富なことは、實に驚くべきものであつて、全然他の諸國と没交渉であつても、困る事なくやつて行ける國である。尙追加して云つておくべきことは、日本から大日本製糖や、明治製糖が長江沿岸に毎年供給する所の砂糖の量のことである。これは非常なものでありますが、排日其他の原因で、どうかすると二三年些とも入らない事がある。それでも何の事はない。支那人はその間は砂糖を舐めて居ないのかと思はれる位であります。しかし四川省などへ行つて見ると、野生の砂糖蔗のうんと出来て居る地方があります。兎に角そう云ふ大きな國で物資の豊かな國でありますから日本の如き小國と戦争をして勝つたとか敗けたとか云ふやうなことは、一般民衆には殆んど關係のないことである。市場でもものゝ値段が極めて緩慢である。幾らか物價が上るとか下るとか云ふことはありますけれども、それも田舎に這入つてゐて見ると大したことはない。兎にも角にも、支那は悠暢な大きな國

でありますから、人間も呑ん氣でもものに拘泥しなくなり又努めてさうしようと思はず別に何とも考へなくなると云ふところが支那民心の實相なのであります。

六十七 支那の關稅自主權の將來

支那の青年はやゝもすると、不平等條約の撤廢とか、租界の回收云々とか云ふやうなことを盛に言ひ立てるものだから、さも支那の全體残らず國家思想が向上して來て、その事のみ力瘤でも入れて居るが如く見える。又それはしかし或る程度までその向上的事實はあるのでもありません。と云ふのは、日本の維新當時と同じく或青年達は社會のバイオニヤとなつて國家を導いて行かうと燃ゆる熱を以つて叫び、聲を大にして宣傳してゐるのであるから、輿論がそれに引きづられて行き、列國も其處にとかく致される傾がある。關稅會議等に付いて見ても列國の考へ方は違つて居ると思ふのである。二分五厘乃至五分の稅金を上げてやると云ふやうなことを條件にして、三年間と

か五年間とかの中に釐金税の廢止を認めた。其準備行爲として支那の關稅自主を認め
た。否原則として關稅自主の花をもたせることを列國が認めた。又さう云ふことにな
るだらうと見越し、増稅のことに賛成をした列國も澤山あるやうである。

支那の地方、殊に山間僻地、又は田舎の運河の交叉點、其の他大きな河川の船着場
などを親しく歩いて見た所では、釐金局の事などは甚だ當てにならぬことだと思ふ。
私は釐金局に行つて泊つたこともあります。月の晩、橋の袂に支那の友人などと一
緒に、鶯鳥の鳴聲きながら立つて居ると、其處へ荷物を積んだ船が入つて來る。釐金
局の役人は通がしこなしに早速其調査に出かくる。或は翌朝の八時頃でなくては検査
をやらないと云つて、待たせるやうなこともあります。何だ彼だと云つて、つまり
隨分苛酷な取立てかたをする。それが一個所や二個所ではないのでありますから、支
那の茶なら茶と云ふ品物が、非常に高いものになるのは當然であります。

四川方面になると、單に此の釐金局ばかりでは無い。更に軍事費を徵發する船など

もあつて、もし之に應じなかつたら、直ぐ岸から鐵砲でも撃たうと云ふやうな勢で構
へてゐる。其處を過ぎる所の船は只では通過させることのないやうにして何處までも
稅を取立てるのである。商人側はとても堪らない。荷主側はいつも泣いて居ります。
コンブラドル等を通じて色々交渉させておられますけれども、要するに駄目である。餘
り強硬に反對でもして居ると、銃殺される。又さう云ふことで地方政治の經濟は立つ
て行つて居るのである。無論そればかりではないが、それがかゝる衛門のものゝ役徳
として一種の仕事になつて居るのである。中央政府の方ではいかにそれを廢めると云
つても、他の方で釐金を取立てゝゐれば何にもならぬ、南京はやめて武漢では廢めな
いといふやうになる。地方の力が強くなつて參りますと、中央からそれを罰するとか、
兵隊を差向けるとか云ふことは容易ではない。支那の實狀を御承知の方はこは大抵お
認めになるだらうと思ふ。

けれども中央政府から命令を出せば、津々浦々に至るまで、其命に従ふと云ふこと

になるには、支那の中央政府次第である。有力なものになれば、そこまで行けるであらう。一方支那の面子を立て、やるといふことで關稅自主權を認めただのであらう。しかし自主を自分勝手に振り廻して、相手の國にも相談もせず勝手にやることを平氣でゐる國である。私は支那の地方の實際の情態から觀て、支那全體が列國の満足するやうな稅關の制度の下におかれるやうなことは百年河清を待つことと同じことだと思ふ。それ故に關稅の方も澤山取つて可しい。又釐金局の方も其時になつて押へが利かなければ、從來通りに取つても可いと云ふことで大目に見てやる積りなら兎も角、そうでなく、釐金局の方は廢めるだらう、そして稅關の方は自主權勝手たるべしと云ふやうなことを豫想して、關稅會議の事を運んで行くこと云ふことは、如何にも支那を買ひ被ぶり過ぎたやりかたではないかと思はれる。自分は平素は地方、地方の釐金局の實際の模様を見てゐる丈にその感を深くするのであります。

六十八 支那人の地味な衣食住

支那の地方問題で、一番難しいのは地方の衣食住の問題であります。此の衣食住の問題はまだ列國には餘りよく知られて居らぬやうに思はれる。支那人の衣食住の問題が、十分に理解されて居らないときは、支那の社會の根本が判らない。外國はとにかく支那人を買ひ被り、又支那の國家を買ひ被る。支那人の生活位安あがりの生活に慣れて居る者はない。その衣食住は無論御存じでありませうが、總べて中々に經濟的に、又理窟に合ふやうにこまかくやつて行くことに徹底して居る。いはゆる文明國人、それは實は文明か半文明か判りませぬが、その文明人といふと内心いかに苦しんでも何處までもその體裁本位でやつて行かうとする。日本人の氣持にはよくそれがある。支那人でも、中にはどんなに苦しい思ひをしてでも自分の面子を保たうとするときはやることもあるが、押しなべて一般についていふと支那の方が、うは手で組織も進んで

居る。日本の方はとかく體裁負けがして居る。例へば宿屋に泊つても、日本人は茶代を置かなければ氣持が悪い。又宿屋の方でも内心その積りである、顔をジロ／＼見て居る。それがたいして失禮でもなく、當然のこのやうになつて居る。

所が支那では、支那宿にお泊りになつた方は御承知でありませうが、支那宿に止宿するときはその人を先づ一應應接間に當たる共同の部屋に通して曰く、自分の宿には部屋がこれ／＼幾つあつて、一等が幾らで二等が幾ら、現在空いて居るのはこれ／＼だけであつて、食事は付かない。食費はこれ／＼であると云ふやうに、等級から何から何までスツカリ話して偕てどの部屋に定めるか、どれがお氣に入りますか、と云ふ。それちや之にしやうと決めてしまへば、一週間居て總體幾ら々々と云ふことが明白に分るのである。日本の宿屋ではかうは行かぬ。少し良い風でもして居ると、控えの間の二つも三つもあるやうな所に通ふされる。ちやほやされても愉快ではない。少し旅行に慣れて居る者からいふと、うるさいやうな氣分になる。これは一例に過ぎぬが、

支那に於ては宿だけについて見ても經濟組織が進んで居る。支那宿に限らず支那の物は比較的チャンときまりがよい。無駄の無いやうに出来て居る。そして又物を粗にしない、物を勿體ないとして丁寧に始末するところなどは感心であります。私は前後三十餘回に亘つて、南北各地を歩いて居りますが、未だ蜜柑の皮の路上に落ちて居たのを見たことがありません。こは即ち陳皮になるので、悉く棄てないやうに取つておくのである。あらかちの家庭では中流以上のうちになると、女は炊事の方に關係しませぬから皆男が炊事をする。ところで炊事の方面でも實に始末が可しいのには感心する。日本人は汽車の中などで見てゐると五十錢の折詰を買つても半分位まで食つて、あとはお菜や飯は勿論、折箱でも棄てしまふものが随分ある。そして平氣である。日本は年々六百萬石からの米が不足してゐる。又木材は非常に少く亞米利加から澤山入つて来るものだから今日の植林事業は只今のところ引合はぬと云ふ譯である。然るに一方に於ては、折詰はどん／＼棄てしまひ、それで日本では氣前が好いと云ふことに

なつて居る。

かゝる無駄の多いやり方を支那人の衣食住に照して考へて見ると日本人はこのやうなことをして居ても可いのか知らぬと考へさせられる。それで統計上を見ると、米は年々多量の蘭貢米を入れ、おまけに國內では、盛んに酒を造り、菓子を造つてゐる。心ある支那人は日本は今後二十五年も経つたら人口が一億萬になるだらうが、先きの見えぬことをしてゐる。それであんなことをして居つていゝのかと云ふやうな心持ちがしてゐることであらう。ところが日本人は一向さう云ふことは考へず、所謂宵越の金は有たないと云ふやうな、その場限りのことを一種の誇りとし、社會も世人をかやうに教育し又學校でもさう云ふ人を造りつゝある。併しながらこゝには日本人が支那人と競争すると云ふやうな氣持で申すのではありませぬが、日本人たるものは、まだくゞしつくり來てゐない。もつと此の生活問題に付ては、周到な注意を拂なければならぬ。生活問題といへば極めて平凡な問題のやうであります、其平凡な中に日本人

は非常に不用意な手ぬかりのことを澤山やつて居る。所が支那人は特別の問題にはせず、さほど氣にしないでゐて自から物に廢りの無い様にやつて居る。是は支那人の生活をして彌が上にも安定させる一つの基礎になつて居るのである。二十人以上も居る可なり大勢な家庭に入つて、色々打あけ話をして見る「あなたのうちの世帯で年にどの位經費がかゝりますか」と聞いて見ると「年に大抵二百圓もあれば餘ります」といつてゐた。尤も程度次第で下から上まで、その暮らしに色々ある譯であるが、極く低い家庭であるなれば、日に十錢か二十錢もあれば、一家族の食べられる方法もある。それ等は無論家に茶碗も無ければ、箸も無い。鍋も釜も持つてはゐないのである。これは支那の社會が野蠻でまだ開けないから、さう云ふ風にやつて行けるのだらうなどと思はるゝかも知れませんが、そうではない。むしろ進んだやり方である。日本でも市内の細長い露路に入つて、長屋住まひをして居る者の様子を聞いて見ると、七八軒もある中に釜がたつた二つ丈あつて、それを早朝から次から次へと廻して行く云ふ

定めになつて居る。これは東京で聞いた話であります。一日に一回しか使はないやうな家具であれば、成るべくさう云ふ風にした方が最も経済的だらうと思ふ。支那でも上海邊りの路次に入つて見ると、鍋釜は勿論、茶碗箸も持たないでやつてゐる家庭があります。子供などは朝わすか銅幣の一銭か二銭をお母さんから貰つて、外に食べに行くのである。するとお粥も賣つて居れば、お汁も賣つて居る。それで十分腹一ぱい食つて來られる。籤引の方法になつてゐてもし好い籤でも當れば三杯でも、四杯でも食べられる。かやうにして下層民達はいかにしてでも飯だけは食べて行ける。又之で満足の出來ると云ふことが、支那民族の最も恐るべき力となつて居る點であると思ふ。

六十九 支那人の生活自衛の觀念

支那に於ける日本人の發展に付ては、政府が如何に補助をしようが、外務省がどん

なに便宜を與へてやるやうにして見ようが、日本人の支那に於ける生活が、支那人と同じやうな程度に引下げることがむづかしいのであるから支那人との本當の競争は出來ない。ところが日本人は支那人の氣持になれない。實にむづかしい。といふのは例へば食ふ物にしても、三河の國から味噌が來たから、今日は一つ三河味噌のお汁を拵えやう、今日は長崎から新しい肴が來たから、それで料理をしようとそれに力を入れる。甚だしいのになると、吉野から櫻が來たから吉野櫻をお茶にして服まうと言ふやうなお上品な風で、自然生活に餘計な費用がかかる。それ故に小店に出かけて同じメリヤスのシャツを、支那人の店から取れば、二圓五十錢まで買へるものが、日本人の店へ行くと三圓も四圓も取られる。下手をすると、五圓位も取られる。それ故日本人は初め一遍位は日本人の店から取る。けれども結局は支那人の方ばかりから取るやうになる。日人の店はそれといふが父親の生活もかねがかゝつてゐる。細君も細君、娘さんも娘さんであるのであるから、その結果、其の生活費を十分に稼ぐ爲に、店の

品物に三割も五割も掛けなければやつて行けぬ故結局支那商人に比べて負けてしまふ譯である。日本人の生活程度の高いと云ふことが、日支小商人同志の競争の上にどの位不利になるか分らない。

尙又無駄な費用と云ふ點からみて最近天津に於ける日本の銀行會社方面の調べたものを間接に聞いた處に依りますと、天津の料理屋その他に持つて行つてその帳場に金が景氣の好い時分には毎年少なくとも一百万圓を下らなかつたと云ふことであります。それは銀行會社の内部のからくりにある事で、その邊のやりくりをどう云ふ風にされて居るか能くは分りませぬが、其の爲に日本の事業の發展した事もたしかにあると云へませうけれども、一方から云ふと又それだけ無駄な生活費がかゝつた譯である。こゝに之を無駄と申すと、一寸誤弊がありますが、要するに思ひがけなく仰山な金が消えて行く。支那人間ではその邊が程度がちがつてゐて餘りないやうであります。かやうな日常生活の費用の上に非常な差のあるからには、日本人は建て直しをやらない

以上到底支那人には勝てないのである。恰度日本人が亞米利加へ行つて勞働をやるに、日本の勞働者に亞米利加の勞働者が勝てないと云ふのと同じことである。その差がどの位の開きになるか判りませんが要するに東洋の舞臺に於ては日常生活の上で日本人は支那人と競争が出来ぬ。これは極めて平凡な云ひかたでありますけれどもその實さうなのである。日本の政府が如何に在支居留民を保護し、どんなに經費の上で補助した所で個人經營の事はどうしても負けてしまふ。それは過去三十年間に亘る臺灣の個人商賣の成績を見てもよく分る。

臺灣に於ては總督府がよく保護をして呉れるから、製糖會社にしても、他の商事會社にしてもどうかやつて行ける。然しそれでも此の頃は又景氣が悪いやうで、總督府のバックして呉れてゐないものは、皆本島人の爲めにやられてゐる。好い仕事は雜貨商でも醬油商でもすべて本島人に取られてしまつた。これは他に色々原因のあることでありませうが、矢張り生活費が日本内地人は高いと云ふことにあると云へる。支

那だつてそれである。個人商賣では支那人にどうしても勝てない。併し最近神戸邊の居留地の話を聞きますと、餘りに日本人のやり方の辛辣である爲め、流石の支那人も居り切れなくなつて、段々廣東へ引揚げて歸ると云ふことであります。最近神戸の理髮業者の間の話を聽いて見ますと、神戸では理髮を開業するものに對しては單簡な試験をすることにしたそうであるが、國語を首め色々な學科まであつて、日本人には差支ないけれども、支那人には受からぬやうに出來てゐるらしい。こはつまり政策上から出てゐることで支那人の理髮業者が非常な勢で安い散髮店を開く、町の商店の小僧さん達などは、どん／＼支那店の方へ行くので、二千人から居る日本の理髮業者はバツタリ立行かなくなつたと云ふ處から其の對抗策としてそう云ふ試験制度が設けられ日本の理髮業者を擁護するやうになつたのであると云はれてゐる。これもその大體の傾向が支那人とは競争が出來ないことを裏書させるものである。そう云ふ事實は大連に於ても、或は天津、漢口に於ても、認められることであります。又上海の文路、乍

浦路、或は吳淞路、と云ふやうな方面には日本人の商店が澤山あります。けれども、支那の事業はむつかしいものと見えて十年経つても二十年経つても、容易に資本の殖えるところ迄は行かない。南京路——大馬路の方に出て見ると大きな店を張つてゐる日比野と云ふ瀬戸物商店がありますが、その他目抜きの場合に個人として踏み出して居る者は二、三軒しか無い。上海に日本人が二萬數千人から居ると云つてゐても、中々むづかしいものとみえる。尤も一方に大きな紡績業や其の他の頼りになる事業が日本人經營でいくらでもあるから、可いと云へばよいようなものであるけれども、日本人の一般海外發展振りから云ふと、むしろ情ない有様であります。かやうな現象を捉へ來たつて之を悉く生活問題で解決するのは少々無理かも知れぬけれども、日本人の海外生活に就いての覺悟決心が足らぬと云ふか、其點で支那に向かつて發展して行くこと云ふ上に不利なところがある。不利と云ふよりも、適應しないやり方をしてゐるのであるから、どうも支那へ折角出て行つても、出榮へがしない。

そこで私は支那に行く日本人は生活振りに於て支那人と同じやうになる丈の覺悟を持って云ひたいのです。けれども、そこまでは行かないにしても、支那人式になり支那式をよく理解するまでになつて欲しい。さう云ふ人は上海にも今日までも既に多少あります。子供に至るまで支那服を着て、支那人の食べものを食ひ、總べて支那人式にやつて満足であるといふ處まで行くならばよろしい。そこまで行けば排日が起つても恐ろしくない。そこ迄の腹が肝腎であるのであります。

尙ほ私がかやうなことを云ふては叱られるかも知れませぬが、是だけのことは十分決心して申し上げたいのである。それはこれまでの投資が全部臺無しにされる時代が来るだろうと云ふことであります。それは上海に在つて朝野の土は何れもなか／＼心配をされて居られることであるし、紡績業者の御心配も一通りでないことゝ考へらるゝのである。日本人に必ずしも恨みがあると云ふ譯でなくとも、時の勢ひ或は日本人が根本的にやられる時が来るであらう。或は又他の外人共のやられてしまふ時も来る

であらう。或は又外人でなく支那自身の資本家がやられると云ふ時も来るであらう。といふのは少しも豫想してゐないときに一寸した子供の惡戯ぐらゐの事からして、日本人全體が暴徒に襲はれてハンマーで以て何も彼も臺無しにブチ壊はされてしまつた事件さへある。在留の日本人殊に資本家は堪つたものではない。けれども暴徒側は其間一滴の水も漏れない様に實によく機密を守つてゐる。その邊の統一のこれてゐることは實に驚くべき立派な手際である。平生から自分は支那に居つて、實際の場合をよく見て居りますが、その點は至れり盡せりと云つて可い。兎に角かやうにいつ何時全部臺無しにされる時代が来るかも知れぬと云ふことは、支那に於て仕事をするものゝ必ず勘定に入れて置かなければならぬ點である。従つて先に述べた四川省の江岸山上に居を構へて居る豪族などの連中の様にチャンと武器を日頃から用意をしてゐてまさかの場合の備へだけをして置くの必要があるのであります。

七十 日本人には宣傳の技能が乏しい

日本人はともかくも先づ第一に日本の日常生活に於て衣食住共に餘り金がかゝりすぎると云ふこと、この生活費の他の國以上に兎に角澤山かゝることが、否かけるやうにしてゐることが支那に於て仕事をする場合に、大變な妨げになつてゐるのであります。

第二には日本人は、非常に宣傳が下手であると云ふことであります。從來のやり口では此の上支那に何億の金をつぎ込んで見ても、殆んど駄目である。宣傳が巧くなければ、冴えない。世間ではさう金を澤山投じなくても、もつとよい成績が擧げられる。彼の南軍が財政窮乏を告げながら、着々効を収めて行つたのは大部分宣傳の力であります。今日本に居る殷汝耕君が一時は上海における南軍の宣傳情報の部長をやつて居たのだが南軍側は皆宣傳が巧い。北軍の奉天側の方には宣傳の腕ぞろひを捉らへて居

らないらしい。その點はたしかに南方に及ばない。

日本の資本家などは技師さへ備へておけばよいと考へ、高等工業とか工科大学とかの出の良い技術家を寄越せば、機械がそれで完全に廻るものゝやうに思つてゐる。他の一面に何萬と云ふ大勢の職工の精神作用が毎日如何に廻つて行くかと云ふとは殆んど考へて居なかつた。精神方面の技師の必要と云ふことに付ては一向考へてゐなかつた。唯棒を翳し工人のそばに臨んで居れば可いやうに思つてゐた。精神的方面に技師を入れると云ふことは資本家の眼中になかつたといふことは、日本の從來の教育の缺陷でもありません。といふのは自分は自分の信する所の善いことをしてゐる。それだからどこに恥かしいことがあるか——こちらは資本家としては正義人道に依つてやつてゐるのだ。何が故に亂暴にも工人どもは家を破壊し、機械を打毀すのであるかと、云ふことを云ふ。斯う云ふ風に自分のみで極めて高くとまり濟した所がある。從來の日本人を使つてゐるやうな場合ならそれでもよからうけれども、現實の問題としては

それではいけない。日本人は必ず宣傳でうまくやられてしまふ。今具體的の問題に付いて申すと、顧正紅と云ふ上海内外綿の職工が工場で殺された事實がある。するとそれに向つて七萬弗の賠償を要求して來た。そして世界中の新聞に皆筆をそろへて「噫、顧正紅、顧正紅」と書き立てた。一工人なる顧正紅の名前は名高くなり、世界的に擴つてしまつた。そうなるとその騒ぎ立てた結果、七萬弗ぐらゐは安いこととなる。少なくとも一萬弗位は貰へるとになる。事實總領事の手から之を渡すことになり内外綿から之を吐き出した。

所が日本の方ではどうであるかといふと豊田紡績の高等工業出の立派な技師で何とか云ふセントルマンが一人その時横死してゐる。水に落ちてなくなつたのである。之に對して向ふが七萬弗といふならば、こちらは七十萬弗も百萬弗も要求して可いのである。ところが誰一人そう云ふことを云ひ出す者が無い。私も當時口を極めて注意をしてみたのであるけれども、日本人は聞きいれない。曰く「言はなくてもこれほど

にやらるゝのだから、そんなことを申立てたら大變だ」と云ふ譯で、唯恐れておぢけがさしてしまつてゐた。紡績聯合會なども何時も唯集つて協議はやつてゐたが、所謂對策であつてその心配をされてゐられた割に、何等先方に向つて正々堂々と積極的に眞向から交渉することをしなかつた。

之に反して支那側では破れかぶれで、賠償金はこれなくとも損はない。幾らでも出來るだけ物にしようといふ譯で強い。それから尙又面白いことには、一顧正紅の死んだに就いて大金が取れるといふので、あの邊の村から正紅と云ふのは私の息子でござるといつて出る親父が七人も現はれて來た。死人に口なしでどれが本當の親父か分らないといふ滑稽なことが始まり、結局七人の間に喧嘩が起つて一番宣傳の下手な先生が可愛想にも「お前は貰つて居るぢやないか取つて居つて、何故取つてゐると云ふことを云はないのか」と云つたさわざになり、袋叩にされた。實際の金はまだ總領事矢田君の手許に置いてあつたそうである。そう云ふこともあつたりして、支那に於ては

宣傳と云ふことが非常な力になつてゐる。軍隊などの方でも所謂百萬と號して敵をおどかせると云ふ譯で、先づ聲で以て相手を風靡してしまふのである。さうすると、こちらでは鐵砲も何も撃たずして無抵抗主義でどん／＼引揚げさせるのである。最近の戦争を見てもそれである。一方は殆んど無抵抗のやうな工合でどん／＼逃げてゐる。北軍とは云へ存外弱い。それは一時的の駆引もありませうし、樽俎折衝の結果でもありませうけれども、大體は南軍の宣傳でやられてゐたものかと思ふ。支那に於ては昔し春秋戰國の世の蘇秦張儀を始めとして、あの當時からしてよく知られてゐる通り宣傳が事業の半分の力を成して居る。

日本人の支那事業は全くさう云ふ社會に飛込んで行つてゐるのである。そうして何億と云ふ資本をそこへ下ろして仕事をして居りながら、不思議に日本人は何程宣傳もやらず、又之に重きを置いてゐない。又やつてもそれが下手である。それですから日本人は何時でも宣傳の點で支那人から致されてゐる。日本人がこの點で支那人の風

上に立てないと云ふことは残念な話であるやうであるが、國民性としての初めつから判つてゐること既に解決されてゐる。日本人と云ふ民族は立派な法治國の人民で、事が起れば結局は裁判官と辯護士で以て話が付くと云ふ所で事業をするならば出来る。宣傳は下手でも仕事だけは澤山やれるのである。支那の國では辯護士や裁判官はあてにならぬ。國家も政治もたよられない。何も眼中におけるものはないのであるから、宣傳が下手であれば萬事おしまひである。如何に自分の家の住ひの塀を高くして見た所が、そんなものは何でもない。一夜にして破壊されてしまふ。日本人は宣傳網の陣營を整へることはどう云ふものか至つて拙い。實を云へば其邊の細かい準備をも十分綿密にやつて掛かるのが本當である。唯今迄の様に技師が行つて機械を廻し、あとは日本人が監督だけしてゐてそれで利益をあげてゐたと云ふのはうま過ぎたのである。これほど危険なことはない。火山の上で仕事をしてゐたのと、同じわけであつたのであります。

七十一 日本人の氣休めの行動を戒しむ

かやうな日本人の弱點を考へてみると、私は支那に對して日本人がその主張を通し、日本人としての體面を維持するやうにする爲には、何處までも平和的に奮闘もしなければならぬと云ふやうなことがいくら決議されても其のやうな決議は効果がない。それは所謂日本式の大和魂を土臺とした處の、日本人的の氣休めになると云ふに過ぎない。日本人は何時でも支那に對して支那式にやらなくてはならぬ。例の強硬な談判をやつて、色々箇條を竝べ立て、謝罪させて見るとか、或は最後に、右の如き不祥事を今後繰り返さないことナンテお定まりのことを誓はしめてゐるけれども、是れ位効力のない空念佛はないのである。斯う云ふことを一箇條書き加へてみた處で、支那人に對しては何にもならぬ。直ぐ翌日にも破棄されてしまふ。それは陳友仁にしても蔣介石にしても誰れだつて外交の達者な連中は、そんなことは空念佛として云ふであらう。

云ひませうが、併し少しもあてにならない。形式だけのことである。そして曰く

「どうも自分の方では當局として充分監視をしてゐただけけれども、目に一丁字のない連中どものやることで、仕方がありません。云々」

と云ふ、それでしまひである。それじや首謀者を罰せよ——と云ふと、首謀者を罰せさせて見たところで、こちらの氣休めになり虫が少しをさまるといふ丈のことである。そうしたからとて賠償金が取れる譯でもない。何にもならぬ。あゝいつたやうな空念佛をよくその條件中に一箇條加へて悦んで居るやうであるが、支那人の目から見たら笑つてゐるであらう。又大官連中で例へば蔣介石君などに會つてテーブル、スピーチでも浴せかけられると日本人はひどくよろこばされる。そして大に肝膽相照したといふやうな氣がして、歸朝して来る。日本人として支那に行つて蔣介石に會ふのは、旅行中の一大事であるかも知れぬ。恰度京都に遊んで祇園に行くやうなものである。も

つと深い意味もありませう、けれども、大體それ位のものである。蔣介石の方でも、日本からの面會人は、次から次へと入り代り立代り幾らでも來るのであるから、其位の積りで然るべくあしらつてゐるものと考へられる。支那のことはよほど支那人の心になつて考へ直して見る必要がある。支那の事は全體が芝居で、餘り力を入れて前後も考へず固くなつて居ると、力抜けがしてしまふ。而かもそれが一箇年か二箇年限りで縁が切れてしまふなら、どうでもよいけれども、日本と大陸とはどういふ縁か何か知らないがともかくいかなる事があつてももう離れられない縁になつてゐる。一寸したことで怒つてみたり、悦んで見たりするやうでは到底大人としての近所つきあひも出來ませぬ。日本としては對内策から時には少しも怒て見ないと可かぬかも知れませぬ。近頃は日本の軍隊の士氣が弛んでしまつたから、出兵をしたのだと云ふやうなことを耳に挿んでゐる。しかし自分はそうは信じたくない。日本の出兵などは恐らく英吉利や、亞米利加の方から利用される材料となつたのみならず、支那の青年達

にしても幾らでも出兵から仕事が出來てゐる。又必ずしも、それによつて日本が憎いと云ふ考へを持つてゐる譯でもない。山東の一部に日本の兵隊が上陸して來た所で長江邊には實際は何の痛痒も無いのであるが、しかし何でもないからとて黙止してはゐない。そこを色々と排日のたねに利用される。而かも日本として、食糧問題や製鐵の問題や種々のことを考へて見ると、實際餘り大きな聲でこゝで云へないことが澤山ある。故に私は出兵に反對だとか賛成だとか云ふのでなくして、長江の經濟問題からして、こはゆゝしい事になるのであることを叫んでおきたいのである。唯出兵は日本人の氣休めになる。又日本人はそれを希望してゐるのである。恰度議會に於ける少數黨の質問みたやうなものである。出來ないことはわかかつてゐるけれども、やつて見る、心ある者は氣休めでなくして知己を千載に俟つと云ふ考へでやるのであらうけれども、是等もつまりは氣休めであります。何と言譯しても氣休めであります。支那の問題は眞劍に考へて見れば、もつと根本に

觸れた事で、大いにやらなければならぬ問題が澤山あるのであるけれども、要するに今日やつてゐる事は日本人は多く氣休めの事をのみやつてゐるのであります。

ところが支那人はそこに行くに徹底して居ります。そのやうな氣休め的なことはしない。好い加減の芝居も打つことは打つ。けれどもそこはズツと段違ひでありまして非常に高い所から見えてゐる。多くの事はそれでゐて氣がつかなくなつたやうな顔をして居る。支那の大官のタイプを物語つてゐる一挿話を話して見ると、かつて某大官が長江の江岸で、日本の名士と會見してゐた際に飲んでゐたビールのコップの中に蠅が一匹入つて浮いて居た。それに氣づかなかつたのではなかつたが、さも知らない顔をして手にとり上げ飲んで、ポツと蠅だけ吐き出した。そのとき日本人であつたならば、直ぐボーイを呼んで蠅が入つて居た事を小言らしく云つて氣を付けなければ可かぬ、と云つて呵附けるに違ひない。或はボーイを呼んで其のビールを捨てさせるやうなことをやるであらう。所が支那人の大官はさう云ふ點に付ては、話の大局に眼を着けて、

場面全体の空氣を反らせないやうにする。蠅などのことは自分だけが我慢をして居れば可いとて知らぬ顔をして居る。日本人は其處の空氣が變つてゐる、そこを知つて居る通り云つてしまはなければ、氣が休まらない。日本人はさういふたちである。是は極めてデリケートな話である。けれども、お互が皆その方である。日本人は清らかなものだけしか飲まぬ。固より濁々併せ呑むといふ事は嫌ひである。清濁併せ呑むことも出来ない。さればもし知つてゐて知らない振りの出来ないやうな人は支那の事業に關係してもうまくいかない。知つてゐて知らない顔の出来るものにして、初めて支那の人々と交渉をすることが出来るのである。そこは支那の人は心得たものである。私の知つてゐる人に、段々支那人化して知つて知らない振の出来る人その名は言ふべき場合でありませぬから、言ひませぬが立派な人であります。いよいよ轉任をすることになつて、支那を出發しなければならぬと云ふので、スツカリ荷造り萬端出来た時分に細君から其の人に向つてもう一軒の方はいゝのですかと云つた。主人は吃驚り

して「もう一軒とは何か——」だつてもう一軒あるぢやありませんか」そこで主人は腹の底をえぐられたので態度が全く一變した。これは支那の或る地方に抱へ家に拵えてあつたのを、今まではその細君が知つて知らぬ振りをして居つたのである。けれども、もうこゝが土俵ぎはで愈々引揚げると云ふ時になつて到頭言葉に出してしまつたのである。よく支那式に我慢の出来た話である。とても知つて知らない振りさへ出来ない人が、支那のことに關係をすれば、その人は必ず失敗する。十年居つても二十年居つても資本も殖えず、成功もせず、うまいことにありつけないのであります。支那と日本の著しく違ふ所はこゝであります。

七十二 改造期に直面せるか最近の支那社會の内情

何時か後藤新平子からのお話であつたが、臺灣で總督府の方の仕事をやつて居る事顯榮と云ふ人の所に、一時日本人なども番頭として這入つて居たことがある。其の時

日本人は例の日本式の潔癖性を現はして、誰某は随分やり手ではあるけれども、しかし、あれは裏面に於てこれこれの香ばしからぬことをやつて居るから、御注意にならぬと可かせぬと言上した。所が主人の答が面白い、「ウムさうか、私はさう云ふ者が私の傘下を集つてゐると云ふことは、非常に愉快に思ふ。もう少しあれが大きくなるまで放かつてそのまゝにして置いて呉れ——これにはその内地人先生大いに赤面をしたといふことである。支那ではどうせ勇將の下には弱卒なしである。支那では大將も大將だが、部下も又部下である。督軍階級もやつて居れば、師團長もやる。以下ズツト下の者まで要領はよろしい。やつてゐる事は同じやうなものである。唯その程度のがひ丈のことである。支那では濁々併せ呑むといふことに依つて、仕事が出来て行く、清と濁ではまだ物足りないのである。例へば之を貨物で云つて見れば、印度から棉がカーゴ、ボートで澤山入つて来る場合に其の幾つかの荷物には全部阿片が詰めてある。之を受取る。又支那人は極めて秘密なものを送り出すといふ様な時には、

棺桶を使ふといふ。棺桶は支那の習慣として絶対に開かれない。而かもそんなことが分つて居ても、そこを知らぬ振りして行く所に趣がある。正義を振りかざしてゐる行為の上に、どこまでもそれを求むといふことは、日本に居て日本人に對する時ならばよろしい。

けれども、支那に於て苟しくも支那人相手に仕事をすると云ふには、さうその潔癖なことのみ云つてゐたのでは實際仕事が出来ない。知つて知らぬ振りをするだけの決心、並に本當に其處まで行けると云ふ自信の無い人ならば、支那の事業はお止めになつた方が可い。お止めになつたら可いと云ふことまで申上げる必要は、勿論ないのであるが、要するに其處の要領を考へて戴きたいのであります。

支那の事情は前にも申上げたやうに、日清戦争でも日本が勝つた積りでゐても、向ふでは負けたとはいはぬ。勝つたやうな積りでやはり居る。少なくとも日本に敬意を表し、日本人を畏れてゐるやうな氣は固よりない。それは政府筋の當局者位に對して

は、畏れてゐるかも知れぬ、けれども、民族全體として、一束にして日本人を眼中に置いてゐるかどうかといふと頗る怪しい。然るに日本人は支那人が吾人を眼中に置いてくれて居ると云ふ風に考へて居る。そこに大いにピントの合つて居らぬ所がある。

日本人は支那で失敗を招くことの原因はたくさんあるが、そこにピントの合し方を知らぬ點が主因の一つとなつてゐる。具體的の話を申しますと、上海に於ける例の五卅事件でも、ストライキから起つて色々の問題を起して居りましたが支那人側の立場になつて色々考へて見ますと、その真相に就いて自分の耳にした所に依ればたくさん原因がある。例へばミュニシバル、カウンスルで道路を造るといふやうなとき、殊に郊外の方面に道路を造るといふやうな場合に、多少の金は地主に拂つて居るか知らぬが、大體黙つて道を造つてしまふ、といふことである。成程さうすれば西洋人達にはアスファルト路であるから便利でせう。けれども、支那人自身は畦道を歩くだけで、少しも差支てゐない。况んや自分の土地を削られて居る。それを兎や角工部局へ抗議

でも持掛て行くと、「お前さんは何も愚圖々々言ふ必要もないことだらう、地價はこの道路に沿うて兩側とも何倍、何十倍と上つて來たのだから、却て感謝しても可い位のものだ」と云ふやうなことを云ふのであります。

又粵漢鐵道では、武昌のそばでかつて數百名の支那工人が英人から殺されて居る。新聞に出るばかりであつた、けれども、英吉利側の非常な反抗があつて遂に出さずに済んだのであります。こは何百名と云ふ支那労働者を枕木を枕にして轢き殺してしまつたことがあるのであります。其の他色々なことが支那人側に重なり重なつてゐる、無論一面に於ては、英人は永年に亘り種々文化事業もして居るけれども、それも支那人の方で頼んだわけではない。頼まれたことは一遍もない、皆押賣りののである。さういふ餘計なことをして、散々窘めて窘め抜いて居るといふやうなことの爲めにそこから排英、排外の運動も起つたのである。公平な立場から云へば、皆各々自分の求めた結果である。事實斯う云はれても、一言ないやうなことになつて居ると云へる。支那

側にピントを合はして見るとかやうに見られるのである。

以上の見方は少し支那人の方に偏り過ぎた見方になつてゐると思はれるかも知れませぬが、お互にもう少し支那人の考へになり、反省をして、日本人の將來の爲めにも又支那人の爲めにも、其邊を十分に了解して戴いて、今度は昭和四年からになるか、五年からになるか分らぬが、双方打落けて春風駘蕩の氣分で新規に出直さなければ、本當の意味に於ける日本人の支那に對する發展は出來ない。今までは何等その邊の自覺はなく、支那人の精神作用、支那人の氣持ちの研究を積むものもなかつた。又うちに顧みると殆んどその支那人に對抗し得るだけの宣傳の方法なんかも有せず、唯投資したといふ丈で、他に全く何等の準備なくして支那に臨んで居つた。私は曾て大阪に於ける或る新聞の社長さんに斯ういふことを言つたことがある——日本で英文の新聞が出るのも結構ですが、一つ上海の舞臺に乗り出してやつて見られたら如何でせう。やる御考へはありませぬか——所が答へて曰く——五十萬の金をのしを付けて出す人があ

ればやつても見ようが、自分の社としてはやる事が出来ない云々——大新聞を以て天下に鳴つて居る社でも東洋文化の宣傳の爲に、東洋の舞臺に乗り出す氣分にはまだなつてゐない。五十萬圓の金はとも角として惜しいものであると思つた。日本はまだ朝野ともにこの程度にゐるのであらうと思ふ。そこに行くに露西亞は腹が太い。最近私の北京に居りました頃、赤化の目的の下に、日本に九百萬圓、支那に千萬圓の金を出して居ると云ふことの某方面に傳へられてゐるのを、聞いたことがあります。廣東方面には當時既に大分の金を出して居りました。豫算外に幾ら出して居るか分りませんが、兎に角支那と露西亞は國情が或程度までは似てゐるので、宣傳で事をやる國柄である。それはあの通り民衆が多く——又民衆本位に事をやるなら、その宣傳の方法を巧に利用して行かなければならぬのである。資本主義で行くものは多勢にはかなはず、負けてしまふ。

日人は擊劍なども強い、柔道も強いには強いが、しかし一人や二人の泥棒の相手な

ら兎に角、二十人、三十人、五十人、百人といふモツブが一時に押寄せて来たといふ時には、柔道の五段であらうが、擊劍の名人であらうが、何も役にたつなくなる。大勢に圍まれては叶はないのである。其處になると支那人は擊劍も柔道も知らなくても唯、その彼等の宣傳が巧い。數を以て打ちかかつて來ると成功する。今日迄の南軍の成功は恐らく軍器や精神の方よりも、寧ろ宣傳の力である。其宣傳の方法は、最近勞農政府の巧みなるやり方であり又その方針でありませうが、農民の間にもまでも發展して來てゐる。農民が鋤鍬を取つて、宜昌の城内にも乗込んでゐた。四五月頃漢口に居りました時、永和號と云ふ、エキステエンヂの錢莊が例の土豪劣紳條例の槍玉に擧げられ、いきなり百萬弗からの財産が沒收された。其前四月半ばには清朝の學者で、説文學の大家であり、戯曲や小説にも秀れてゐた葉德輝先生が長沙の町で殺されてしまつた。支那の社會は民衆の力を頼んで、新らしい思想からブルジョア階級を根こそぎに殺害し、社會の改造をやつて革命の完成をやるうと云ふのである。當時武漢の政治

には消長があつても、その社會には盛にレーニン、マルクスに關する書物が出版され、雜誌としては紅燈其の他の共産黨宣傳のものが出てゐた。共産主義A、B、Cなどといふわかり易い種々赤い方面の書物がどつさり流布して、而かも非常に價が安く、供給せられてゐた。斯の如くにして武漢の天地は今日既に社會改造期と云ふか、革命期と云ふか、さういふ非常な時期に際會してゐるのであつて、今では牧野伸顯伯の會長をしてゐらるゝ同文書院までがスツカリやられて居た。こゝは江漢高級中學校と改名されてゐるが………(速記中止)——委細面談にゆずることにしたいものである。

七十三 支那社會の推移は豫斷を許さない

かやうな譯で支那最近の社會状態は變りも變り、非常な變りかたである。湖南、湖北、江西あたりでは、地方にゐるもので三千圓以上の財産を有つてゐる金持は、之を密告して來た者には褒美をやることになつてゐる。逆産を有する所謂土豪劣紳である

といふのでその財産の出來た経路を色々調べて、それを不法の所得であるとし之に封印し、沒收し、或は主人を拉致して銃殺するといふやうな順序になるのであります。最近では又南京政府の方でも、土豪劣紳懲治條例といふものを出して居ります。讀んで見ますと、蔣介石の政府は表面反共産主義を唱へて居るやうであります。これらの條例は武漢の方と可なり似たもので、相當以上殘酷に出來てゐるやうであります。支那民族は一概にはいへぬが、北方政府は軍閥であるといひ南京の三民主義の政府は穩健だとかいつて、それに好意に寄せて見たり、或は又武漢政府は極端に從來の社會を破壊するものであると云つて、之を甚だしく初めから毛嫌ひをして見たり、色々にやつてそれ〴〵列國からの同情を得たり、或は批難攻撃を受けたりやつて居りましたが何れも之をダーク、サイドから云へば同じ穴のむじなである。同じやうなことをやつて來た經歷を有つて居るものばかりで、いざと云ふ場合には又同じやうな殘忍なことをやらぬとは限らぬ。南京濟南に於て嘗めた所謂正規軍のやり方を見ても、そ

の邊の消息は能く證明されて居る。それを一方は聖人君子の如くばかに買ひかぶつて見たり、一方はバーベリアンの如くに見下さげて見たりするのは、餘りに支那の事情をシンプルに見たもので、國民性を無視したものである。

或は又政府から斯う云ふ言質を得て居るからとて、もう大丈夫だ、南京は信用してよろしいと云ふ様な事を思ふものがあるならば、それは列國と同じ程度の信を置ける國に於てこそ初めて云へるのである。斯様な事を言ふといふのは、自分の國情に見る普通の慣例を基として支那を推測するものであつて、結極莫迦を見る破目に陥ることを承知してゐなくてはならぬ。又支那の方から云へば、列國に莫迦を見させるのは何でもない。何時でも支那の方から先手を打つ。すると列國は之に對してどうして呉れ斯うして呉れと申立てる。所謂文明國が眼に一丁字も無い支那暴民衆愚兵隊どもから、先手を打たれて、二進も三進もならぬやうな苦しい目に遭はされる。或は英吉利の議會を騒がせたり、日本朝野の有識階級を騒がせたり、又資本家を騒がせたりする、殆

んど教育も何も受けて居らないやうな連中でも、結構一等國を向ふに廻して自由自在に之を翻弄する。散々亂暴をやつて置いて、後は知らぬ顔をしてゐる。又それを支那政府のものは利用してゐる。それで後で色々列國からして條約違反だとか云つて抗議を申し立て取極めをすることもありませんが、要するにやられた方がいつも負けと云ふことに決つて居る。それと云ふのも初めから列國が暴民たちのことであるから皆眼中に置いて居ない。おいてゐないものからやられるので、それをやられない様にするには、どう云ふ風にしたら可いかと云ふことは支那人自身にしても、官憲にしてもなかなかその方法がつかない。唯しかし支那人はいつもそれを利用して居る。又それだけの覺悟をしてゐると云ふことを申上げる外に、何も無い。しかし支那のことは大抵何事でも豫想して置くの間違ふ。能く支那の軍閥其の他に付いて、豫測などされることがあるけれども、支那の問題の將來は誰にもわからぬ。豫言などしても決してその通りになるものではない。

七十四 支那人の生活に見る心のゆとり

そろそろ話の結びに入りたいと思ひますが、支那の大社會は、日本の社會組織とちがつた組織を持つて居るし、それに、又支那人の常識は日本のそれとは十倍、数十倍、數百倍といつた大きな大陸的の常識を有つてゐる。而かも平素實際は日本を眼中に置いてくれてゐるでなし、列國も又眼中に置いて居ないらしい。辭令の上に於てはチャホヤ言つて呉れますが、いざとなつては一向眼中に置いてゐない様な仕打ち行動を執る。又今後益々その傾がある。と見ておくの外ないかも知れぬ。従つて今後日本の植民——と言へば言葉が悪く穩かでない。當らないことになるのですが、支那に行つて事業をやる人々は、衣食住を初めとして、日常生活に對する從來の日本式の考へを、押し通すと云ふを改め、同時に出来るだけ安全な、自衛の途を取り得る様仕組を拵へておかなくては百年の計を立てた仕事は出来ない。唯一言自分自身の所信からして、

斯ふ言ふことは申上げて置きたい。私は随分危険な土匪の村や馬賊の出沒する深い山の中などに入つたり、又夜分變な傭兵と一緒に歩いて見たこともあり、或は氣持の悪い駕籠に乗つて夜の山路を行つたこともあり。能く人が「君はピストルを有つてゐるか」——「そんなものは持つて居ない」と云ふと「それじゃ僕のを借してやるから持つて行け」と云つて呉れますが、しかし私は何時でもそのやうな兇器の必要はないから「要りませぬ」と斷る。或は一度上海で大谷光瑞師から「奥地を歩きなされるのなら護衛兵の五六人も伴れて行かれたら」と言つて下さつたこともあるが、私は「御親切は有難ふございますが、私のやりかたは」と言つてお斷りをした。多くの人は奥地の支那人と言ふものに對して間違つた考へを有つて居て、初めから良民でも何でも泥棒であり、人を打殺すものだと言ふ風に思つてゐる。それは能く支那語を操り、幾十年も支那の土地に住みなれて居つたと云ふ人でも、そう云ふことを考へて居るものがある。さう云ふ方に限つて、平素二言目に支那の惡口を云ふ。必ず支那人は恩を知らな

いとか、支那人は穢惡であるとか云つて、支那人のダークサイドの方面ばかりを指摘しようとする。自分も裏面は知つてゐる。併し素と支那人はどんなに悪い行ひをして、人其のものは悪くはない。實にキヨロリとしてゐて面白い、淡白であつて、滑稽味があり、飄逸味もあつて、人間としての味がたつぷりある。その金儲けに汲々として居るやうであるが、反面には日常生活に美點があり、又一種の人生觀を誰れ人でも持つてゐて、その間に非常に裕りがある。誠に民族としては面白味のある平和な民であると思つてゐるのである。何時も云ふ通り上海九江路あたりの、銀行のたくさんある、クォーターに行つて見ると、銀行の窓の所に鳥籠をブラ下げて鳥を相手にしながら算盤を弾いてゐる先生もある。日本でそう言ふことをしていやうものならば忽ちポナナスに影響する。さう云ふ風なところに、非常な裕りを有つて人生を達觀して居るのである。

されば自分は、支那人を見るといつでも可愛い氣持がする。それで私は眼に入れて

も痛くないやうな感じが致しますので、支那の若い學生などの保證人にもなつて居りますし、支那青年の爲めに國情を話してゐたら、北京の陸君といふのがポロリと涙を出したこともある。支那には色々な方面の人々に知己を有つて居りますが、要するに支那の人々は皆頗る可愛いところがあります。私がさう云ふ風に思つて居るからか知らぬが、又向ふの相手方の方でもなかなか好い感じを以て接して呉れる。如何なる危険な場所、いかなる戦争のときでも危険を感じたことはない。或は明日立つては危いから、もう少しゆつくりして居らつしやい——と云ふ。或は半分は御世辭で言つて居るのかも知らぬけれども、不斷の氣持が能く分つて居りますから其點については疑はない。殊に禪宗寺などの客室にも能く參りますが、禪寺の畫僧、詩僧などの連中と話をして居ると、中々詩を作ることの巧みなや繪の巧い坊さんも居たり、又相當學問の秀れたのも居たりして賑かである。又尼さんも出て來て實に愉快です。支那の田舎はむしろ私としては天國に遊んで居るやうな氣分になつて居ります。

かやうなわけで私などには何等の不安がない。さう云ふ話をする人によく「君が若し交渉ごとなり何か掛引の用を有つて歩いて居たとすると、さう云ふ譯に呑氣には行かぬぜ」と云ふものもありますが、それはそうかも知れませぬが、それは思ふに、それ／＼其の人に備つて居る事であつて、支那人の心持は總て、小鳥を弄びながら算盤を弾くといふ氣分である。その心持で以て金儲けのことをも呑氣に考へてゐる。日本人のやうに殊に此の頃の學校出のものゝやうに齷齪しない。あの面白味のある風俗人情、習慣等をよくかみしめつゝ自分の仕事をするに云ふことにすれば、仕事其のものも上品に發展するだらうし、また自然と意外の方面に手も擴がつて行くことであらうと思ふ。つまり支那人の生活は極めて單純なうちに風流味があるのであります。

七十五 支那民族の日常生活

日本人は、とかく大阪に於ても又東京に於てもさうであります、支那に對して何

だか歐米の延長たらんことを希望してゐるやうな氣分が見える、といふのは第一上海などに行つてみても、日本人は成るだけ英語をよく使ひ、支那語を話さうとはせず、成るべく西洋人の恰好をして、朝早くからゴルフリンクに出掛け、倶樂部に行けばゴルフの話でもする方がよく持てる。獨り上海のみならず、天津でも漢口でも、どうかすると、又北京邊りでもさうであります。支那を歐米の延長の如くみてゐて、支那の土地と云ふことには一向考へを及ぼさない。かくの如く支那を見やうとするものが少ない。又丸の内あたりの本社の方でも、さう云ふ考へで支店長其の他の社員を見てゐる。これは元來を云ふと甚だ間違つたことで、此のあまたの立前を變へない限りは、如何に有爲の人材を支那にやり、又いかに澤山な人が支那に出かけ又如何に何億の資本を支那におろさうとも、ほとんど無意味に終るのであります。

これはどうしても亞米利加か、何處かに行くやうな積りでゐる考へを、一日も早く改めて貰ひ度いのである。そこが改たまらないでは、幾ら資本を殖したつていくら計